

麗澤・地域連携実習  
2020 年度成果報告書

## ～麗澤・地域連携実習の目的～

麗澤・地域連携実習は、PBL (Project-Based Learning: プロジェクト遂行型学習 または Problem-Based Learning: 問題解決型学習) を全学的に推進するために 2017 年度より始めた取り組みである。PBL 型の学びを 1 年生のうちに体験し、その後の学生自らの発案による PBL につなげて行くことを狙ったものである。また、参加者が取り組む課題は、行政や企業が現実として直面している問題であり、その調査や課題解決のために参加者が行う提案の評価を柏市・柏市内企業と大学が連携して行う点に特徴がある。

大学教育の社会的役割が強く問われる時代となって重要視されているのが、自ら問題を発見し、どうすればよいかを考え実践する人材の育成である。日本のように経済的にも文化的にも成熟した社会において、今以上の豊かさや便利さを獲得するには、技術的な面に留まらない広い意味でのイノベーションが必要なためである。そうした人材育成のためには、答えの無い問題について学生自らが考え試行錯誤する機会が必要であり、従来の知識伝達型の教育とは異なるアプローチが必要とされている。

その 1 つが PBL であり、プロジェクト遂行や問題解決に学生が自ら主体的に取り組むことを通じて、問題発見能力や問題解決能力を育むことを目的としたものである。本学でこれまでに行ってきた PBL 的な取り組みは、その実施形態から大きく 3 つに分類される。まず、授業として行われるが、学生が自ら問題設定をし、その内容を考えて担当教員の依頼までを行う自主企画ゼミ、次に授業として行われることは同様であるが、その内容や体制はある程度担当教員がコーディネートする企業・社会実習のような科目、そして授業とは関係がない取り組みであるが、必要に応じて教員が学生のサポートをしたり、大学が費用面で補助をしたりする模擬国連のような取り組みである。

自主企画ゼミのように、学生が自らプロジェクトや問題を設定し、施設や制度、教職員と言った大学のリソースの活用を考え、成果を得るまで能動的に取り組んだ PBL は、本当に学生の成長につながる。成長を一言で表現するのは難しいが、目を社会に向け、自分が活躍できる場や貢献できる問題を探し、どうすればよいかを自分で考えて行動できるようになるのである。そうしてまた次の成功体験を獲得し、社会的存在としての自分に自信を深めて社会に出て行くことができる。

しかし、そうした PBL を自らの発意に基づいて実践できる学生は残念ながら多くはない。大学入学までの通常の学校教育を想定すると、自ら問題設定をしたり、その解決のために学生の方から大学のリソースを使うことを考えたりすることは、あまり簡単なことではないと思われる。授業も学校設備も各種教務サービスも、これまで与えられるものであったわけだから、大学生になったからと言って「さあ、これからは自分で考えましょう」と言われても、多くの学生は戸惑うだけであろう。必要なのは、教職員も大学の設備も望めば自らの意思で活用することができ、自分取り組みたいプロジェクトや問題解決のための協力が得られることを実感し、自ら発意する PBL につなげていくための機会である。

以上のような問題意識から、麗澤・地域連携実習は 2017 年度より学部問わず全ての 1 年生に対して、1 学期から夏休みにかけて PBL を体験する授業として実施された。PBL 的な取り組みを体験して小さくてもよいから成功体験を獲得し、その後の能動的な取り組みにつなげて行くことを主眼とするものである。体験であるから、問題設定や協力が得られる教職員などの大学のリソースといっ

た、PBL に取り組む際のハードルとなる部分はぐっと下げて、大学側がお膳立てをする。この体験を通じて、やることやそのための準備など PBL の全体像を把握するとともに、どの教職員がどういった問題に対応可能か、どういった施設や設備が活用できるかを知ること、自分が発意する場合の PBL をイメージしやすくすることを狙っている。

また、本プログラムの特徴は、行政や企業が現実として直面する問題を取り上げ、その調査や学生の提案の評価を大学と受け入れ先の市町や企業が連携して行う点にある。ヒアリング調査に行くためのアポイントメント取りなどは学生自身がやらなくてはならないし、提案をプレゼンテーションして評価やコメントをしてもらうのも受け入れ先である。もちろん担当教員は、学生が考える調査からプレゼンテーションに至る計画や作業項目について指導は行うとともに、トラブル発生やミスを犯した場合のフォローは行うが、実際に学生が成果を得るために働きかける相手は受け入れ先である。高校を卒業したばかりの 1 年生にとって、学外の方の協力を取り付けることは初めての体験である場合が多く、容易ではないことが予想されるが、それが出来るということを大学生生活の早い段階で経験しておくことは重要である。大学における学びは、社会に目を向けて、自分がそこでいかに生きて行くかを想定し、自らがコーディネートしなければならないからである。

このように麗澤・地域連携実習は学外の方々に学生の調査などにご協力いただいて成立するプログラムであるが、2020 年度はコロナ禍という問題が生じ、学生がヒアリング調査にうかがったり、学生のプレゼンテーションへのフィードバックをいただいたりすることが、これまでのやり方では困難となった。通常 1 学期に実施していたものを 2 学期に延期して事態の収束を待ったが、依然として学生の移動を伴う活動は制約されたままだった。しかし、こうした状況だからこそ、オンラインを活用してこれまで通りの実習を行うことに意味があると私たちは考えた。アフターコロナにおいても、調査やグループワークにおいてオンラインを効果的に使うことは、これからの学生にとって必要なスキルとなるからである。

オンラインでのご協力を前提としながらも、2020 年度は柏市から 5 課題、柏市内企業 5 社からそれぞれ 1 つの課題をご提示いただいた。また、オンラインを活用しての実習への学生の意欲も高く、例年履修者は 50 名程度であるのに対して、2020 年度はその 2 倍以上の 118 名の履修希望があった。これらの履修希望者を、グループワークが可能なように課題への割り振りを行った結果、目次に掲げる 10 の課題への取り組みが行われた。本成果報告書は、各課題に取り組んだ学生が、そのプロセスと成果について課題ごとにまとめたものである。

本授業は柏市・柏市内企業 5 社の多大なご協力があって、はじめて実現可能となった。特に、2020 年度は初のオンライン対応ということもあり、その準備や学生とのやり取りに例年以上のご負担をお掛けした。ただ、多忙な職務の合間をぬって、学生の調査や提案の評価などにご尽力いただけたことは、実に得難いことであった。こうした献身的な取り組みがあってこそ、地域と大学とが連携して人材育成に取り組むことを実践することができた。ご協力に深く感謝申し上げたい。また、柏市協働推進課には、柏市の多様な部局と大学との窓口を一手にお引き受けいただき、各部局との調整などに多大な労力を割いていただいた。末筆ながら、ここに感謝の意を表したい。

2021 年 3 月

麗澤大学 地域連携センター長  
籠 義樹

## 目次

1. スマートフォンアプリを活用したAED運搬システムに必要な救命ボランティアの募集について…………… - 4 -  
担当部局：柏市消防局警防課
2. 若者の自殺予防を考える…………… - 10 -  
担当部局：柏市福祉政策課
3. 外国とつながる親子・子どもの状況調査…………… - 17 -  
担当部局：柏市子育て支援課
4. カシワワカモノプロジェクト  
（1）Aグループ…………… - 22 -  
（2）Bグループ…………… - 26 -  
担当部局：柏市協働推進課
5. 男女共同参画推進事業…………… - 29 -  
担当部局：柏市協働推進課
6. 「えんとつ町のプペル」バス個展開催に向けて…………… - 36 -  
担当部局：麗澤校友会
7. 花奏～かえで～…………… - 44 -  
企業名：千代田造花株式会社
8. 新メニュー開発とSNSを活用したマーケティング…………… - 53 -  
企業名：Café Path Travel & Eats（柏レザー株式会社）
9. イオンモール柏の地域に根ざした魅力づくり…………… - 55 -  
企業名：イオンモール柏
10. 加飾紙を若者へ知ってもらうには…………… - 66 -  
企業名：有限会社湯島アート

# 1. スマートフォンアプリを活用した AED 運搬システムに必要な救命ボランティアの 募集について

担当部局：柏市消防局警防課

## 外国語学部

外国語学科中国語・グローバルコミュニケーション専攻	高橋 晏那
	服部 風馬
	古山 ゆりか

## 経済学部

経済学科経済専攻	馬淵 桃香
経済学科観光・地域創生専攻	工藤 誠也
経営学科経営専攻	金子 紀輝

## 国際学部

国際学科国際交流・国際協力専攻	安藤 優花
国際学科国際交流・国際協力専攻	中村 優芽

担当教員	国際学部	内尾 太一
------	------	-------

## 1. プロセス

日程	内容
11月2日	オリエンテーション ・ 自己紹介 ・ 教材の共有（昨年度の報告書） ・ AED GO のインストール
11月12日	第1回ミーティング ・ メールマナー、質問項目決め
11月19日	第2回ミーティング ・ メールマナー、質問項目決め
11月26日	第3回ミーティング ・ インタビュー練習
12月3日	消防局警防課山仲さんインタビュー
12月10日	第4回ミーティング ・ インタビューの振り返り、今後の計画
12月17日	第5回ミーティング ・ 動画とポスターの作成
1月7日	第6回ミーティング ・ 動画とポスターの作成
1月13日 1月14日	消防局救急課から AED デモ機と人形を借用 第7回ミーティング ・ 動画撮影・編集、ポスターの作成
1月29日	第8回ミーティング ・ プレゼンの準備
2月3日	全体報告会

## 2. テーマの概要

柏市では、スマートフォンアプリ（AED GO）を利用した AED 運搬システムの運用を行っている。そのシステムはボランティアの参加を必要とするが、登録者数が少ないせいもあり、現時点ではその機能が十分に発揮されていない部分もあるようだ。そのため、大学生である私たちがこの課題と向き合うことで、現状を知り、ボランティアの数を増やすアイデアを提案することを実習の主な目的とする。

はじめに、AED(自動体外式除細動器)とは、電気ショックにより心臓の細動(けいれん)を取り除くための機器である。心室細動を取り除き、正常に動かす準備をする仕組みがあり、誰でも使用することができるものである。空港、駅、学校、スポーツクラブなどの公共施設だけでなくショッピングモールやコンビニエンスストアなど多くの場所に設置されている。

次に、AED GO とは、緊急時に AED を素早く現場に届けるための AED 搬送ボランティア募

集アプリのことである。AED GO の仕組みとして、まず 119 番通報があり、消防局が AED による処置が必要だと判断した際に消防指令センターから、AED GO のアプリをインストールしたスマートフォンへ救命ボランティアを募集する通知を出す。すると、アプリの画面上に AED が必要な現場と、その場所から最も近い AED の設置場所が表示されるので、そのスマートフォンの持ち主は AED をとり、救命ボランティアとして現場に急行し、救急隊到着まで応急処置を行うという流れである。

重要なポイントとして、この仕組みに参加するためには、一般市民が事前に自分のスマートフォンに AED GO のアプリと、柏市への AED GO ボランティア登録を済ませておく必要がある。

そして、柏市の取り組む AED GO 普及の課題は、大きく分けて 3 つある。それは認知度アップ、若い世代の登録者数の増加、プッシュ通知への反応だ。

#### (1) 認知度アップ

要救助者の生存確率を高めるためには、迅速に AED のある場所を見つけて要救助者の場所まで送り届ける必要がある。その時に一秒たりとも無駄にはしていけないために沢山の方に AED が設置されている場所をマップ上で見やすく、必要な場所から一番近い最短の場所が分かる AEDGO というアプリを認知していただきたい。

#### (2) 若い世代の登録者数の増加

特に年代層が上に行けば行くほどスマートフォンを使いこなすことが難しいことやそもそもスマホを所有していない方が若い世代と比べて多いため、若い世代への登録者の増加が課題になっている。

#### (3) プッシュ通知への反応

いざ登録していただいても通知が表示されそれに気づいてアクションを起こさないと意味がないので通知をオフにしないで、もしも AED の通知が来たら AEDGO アプリを開いて地図上で分かる最短な AED が設置されている場所に行き届けてほしい。

### 3. ヒアリング調査

柏市や AED GO のホームページで基本的な情報を収集した上で、私たちは柏市消防局警防課情報システム担当、山仲航平氏と 12 月 3 日にアポイントメントをとり、zoom によるヒアリング調査を実施した。

そのインタビューではまず、柏市のこれまでの AED GO 普及のための取り組みについて活動などを伺った。例えば去年 (2019 年)、チラシを配布して AED GO の登録者を募った時は (※柏市駅前の祭りでは、2019 年度の実習チームも参加した)、十分な効果が得られなかったという。しかし、市内のマラソン大会等のイベントで、消防局の職員の方が実際に AED GO のボランティア登録のサポートし、さらに記念品を渡していたときは、一定の登録者数が得られという。

以上を踏まえ、今年度からは市として AED GO キャンペーンを実施している。それは、市内の事業団体の構成員の 50%以上、もしくは 30 名以上が AED GO に登録すると、消防局長から感謝状と、「AED GO 協力企業」もしくは「AED GO サポーター」であることを示すス

テッカーが贈呈されるというものである。そうした企業として、インタビュー中では、第一生命保険株式会社と株式会社クオリティの名前が挙げられた。このキャンペーンにより、登録者数が大幅に増加したという。

その他にも、今年度からはツイッター上で「今日の AED 川柳」を発信し AED の認知度を上げる取り組みをしている（柏市消防局公式アカウントの 11 月 20 日の投稿より「救急車待ってるだけでは 助からぬ」）。こうした投稿で、1 度につき AED GO の登録者が 1、2 人増加しているようだ。ただし、川柳のネタを幾つも考えるのは容易いことではない、と山仲さんは教えてくれた。

#### 4. 提案内容

定期ミーティング時に、改めて AED GO のボランティア登録者数を増やすためのディスカッションを行なった。そして、柏市の若者の中でも、自分たちに最も身近な麗澤大学の学内での PR 活動をするのが効果的ではないか、という考えに至った。具体的な方法として、実習メンバーを 2 グループに分け、「学内でのポスター掲示」と「学生目線での動画作成」に取り組むことになった。

##### (1) 学内でのポスター掲示

ポスター制作の動機として、私たちは救命ボランティアを増やすためにも大学内全員に AED、AED GO について関心を持ってもらう必要があると考えた。そこで私たちは二枚のポスターを作成することにした。

一枚目は AED 使用を促すことを目的とし、AED の有効性を分かりやすく表現するため、グラフを用いて危機感をもってもらえるようなデザインに作成した。

二枚目は AED GO の登録を目的とし、スマホで命が救えるということを伝え、アプリの QR コードを載せたポスターを作成した。これらのポスターを学内に設置された AED 付近に貼ることで関心を持ってもらうと同時に、AED の場所を周知させることができると考えた。



##### (2) 大学生目線の動画作成

AED の使い方をわかりやすく伝えたい、AED GO をみんなに知って欲しいという思いから自分たちで動画を作成しようと考えた。

大学生ならではの、ということ意識し、実際に講義中に教員が倒れた場合を想定して、大学キャンパスで撮影を行なった。倒れた人への対応として心肺蘇生法 (CPR)、AED の使用方法を紹介した後、大学内の AED の場所の紹介などを交え、AED GO 普及の呼びかけに繋げた。

AED の使い方・AED GO の存在を伝えることはもちろん、大学生活の中で役に立つ動画を作成することが出来たと考える。





## 5. 柏市消防局警防課からのフィードバック

柏市消防局警防課の山仲さんから文章でフィードバックを頂いた。ご本人の許可を得て以下に原文を掲載する。

*AEDGO 普及のための課題の抽出、課題解決策としての麗澤大学内での PR 活動にご尽力いただき誠にありがとうございます。*

*ポスターについて、性質上チラシ同様に、見た人が能動的に内容を読み理解しなくてはならないため、興味を持って登録してもらうことは難しいのではないかと考えておりました。しかし、作成頂いたポスターはイラストやグラフがメインで分かりやすく表現されているため、AED 使用の重要性が見た人に感覚的に訴えられ、そのまま AEDGO への登録にも誘導されやすいのではないかと思います。今後の登録者増加にも、十分期待できるのではないかと感じております。*

*動画について、講義受講中の大学生の視点から作成されているため、視聴した大学生に自分だったらうまく AED を使用して救命できるだろうか、と自問自答していただけるきっかけになると感じました。この動画で、麗澤大学生への AED に対する意識づけと、AEDGO を認知、登録していただけたら嬉しい限りです。*

*現在は授業もオンラインと伺っているため、ポスターや動画が学生さんの目に触れる機会は少ないと思いますが、今後の麗澤大学生の救命ボランティア増加を期待しています。*

## 6. 感想・まとめ

次の文章は、メンバーそれぞれの感想を集約したものである。

実習が始まるまで、AED は自分たちにとって縁遠い存在であった。そういうものがあることは知っていても、使う場面はないだろうと思っていた。これが、若者の一般的な認識ではないだろうか。もし目の前に人が倒れても、AED を、という発想はすぐには浮かばず、その場で固まってしまうかもしれない。

消防局の山仲さんへのインタビューは、そのような意識を変えるきっかけとなった。実習メンバー全員が非常に重く受けとめた事実は、AED の使用率と心肺停止から蘇生率の強い結びつきである。知識を得るうちに、「他人事ではなく自分が尊い命を助けないと」という考え方が共有されていった。そして、その使用率を上げるためには AED GO の普及が重要となる。しかしながらその普及率がなかなか大きく伸びない。そして、AED GO の取り組

みは多くの方が救命ボランティアに登録してこそ真価を発揮する。

では、自分たちに何ができるのか、を考える段階に入ってから、動画班とポスター班に分かれてのグループワークを行なった。AED GO を世間に広く認知させることの難しさを感じつつも、他の人と企画をつくる楽しさをこの実習を通じて感じる事ができた。それ以外にもアポイントメントの取り方やインタビューのテープ起こしの体験など、ひとり一人が様々な学びを得た実習となった。

## 2. 若者の自殺予防を考える

担当部局：柏市福祉政策課

### 外国語学部

外国語学科英語・リベラルアーツ専攻	一条 慈笑
外国語学科英語・リベラルアーツ専攻	高橋 実沙紀
外国語学科中国語・グローバルコミュニケーション専攻	渥美 駿士
外国語学科中国語・グローバルコミュニケーション専攻	島田 笑梨花

### 経済学部

経済学科経済専攻	尾張 玲斗
経済学科経済専攻	工藤 遥翔
経済学科観光・地域創生専攻	阿部 航大
経営学科AI・ビジネス専攻	高橋 響

### 国際学部

国際学科国際交流・国際協力専攻	相川 麻衣
国際学科国際交流・国際協力専攻	ベルサバル ホセレイジュニアエスピナ
グローバルビジネス学科グローバルビジネス専攻	大森 花恵
グローバルビジネス学科グローバルビジネス専攻	小曾根 凜
グローバルビジネス学科グローバルビジネス専攻王	カンセツ (WANG HANXUE)

担当教員 国際学部 内尾 太一

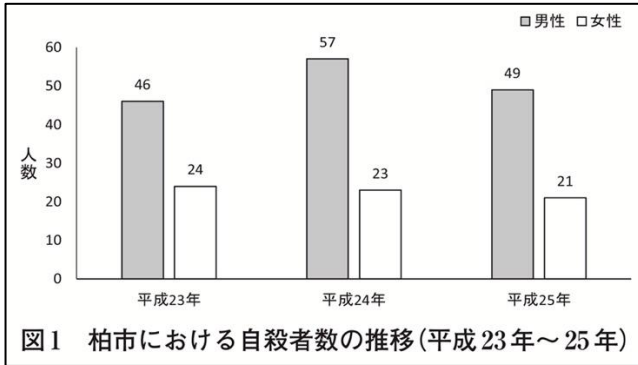
## 1. プロセス

日程	内容
11月3日 11月10日	オリエンテーション ・自己紹介 ・教材の共有（昨年度の報告書、自殺予防ゲートキーパー養成研修用映像）
11月12日	第1回ミーティング ・チーム分け（水曜チーム、木曜チーム） ・担当分け（水曜：学生相談室、木曜：柏市福祉政策課）
11月18日 11月19日	第2回ミーティング ・メールマナー、質問項目決め
11月25日 11月26日	第3回ミーティング ・質問項目決め、インタビュー練習
12月2日 12月3日	学生相談室吉原さんインタビュー（水曜チーム） 質問項目決め、インタビュー練習（木曜チーム）
12月9日 12月10日	インタビューの振り返り、今後の計画（水曜チーム） 福祉政策課吉田さん剣持さんインタビュー（木曜チーム）
1月7日 1月13日	第5回ミーティング ・「デスカフェ」の企画
1月14日 1月20日	第6回ミーティング ・「デスカフェ」の企画、関係者の招待
1月28日	Zoomによる「デス・カフェ」の実施 福祉政策課剣持さん、学生相談室吉原さん、とうかつ生と死を考える会竹内先生からのフィードバック。
2月3日	全体報告会

## 2. テーマの概要

今回の実習の目的は、若者の自殺予防について、柏市の現状と取り組みを学び、学生の目線からの具体的なアイデアを提案することである。

まずは柏市の現状について述べる。「千葉県柏市における自死の現状に関する調査報告」によると、平成23年～25年における柏市の自殺者数は男性152名、女性68名の計220名である。年間70名～80名で、男性が約70%、女性が約30%を占める。自殺者の平均年齢は49.58歳で、年齢の範囲は14～98歳であった。男性は30代、女性は60代が多い（男性24%、女性25%）（中村 2016：12）。



(中村 2016 : 12) より転載。

また、同文献によると、自殺者数が最も多かった男性30代である36名のうち、29人は独身者であることが分かった(30代男性の自殺者で独身であったのは約80%、60代男性では約44%)(中村 2016 : 20)。著者の中村は、自殺防止のための支援環境に関連して地域コミュニティの果たす役割をあげる。市内でも自殺率の高い地区よりも低い地区の方が、ふれあいまつりなどのイベントや交流事業が多いことが分かる(中村 2016 : 21)。

次に柏市の対策についても紹介する。

柏市は事前予防、危機対応、事後対応、段階別支援の四つの段階に分かれた取り組みを行っている。その取り組みの一部として、SNSによる悩み相談や千葉県いのちの電話相談、自殺予防ゲートキーパー養成研修がある。千葉県いのちの電話相談は24時間、年中無休で行われている。しかし、多くの課題も抱えている。

以上から、今回の具体的なテーマとして、以下の二つについて実習を通じて深く考えることにした。

1. なぜ死にたいと思うのか、思ったことがあるか(課題:若者の自殺の大半は原因不明)
2. もしも自分が自殺したら/遺族になったら?(課題:遺族へのケアに特効薬は無い)

1.について、若者の自殺の大半が原因不明である以上、課題解決に近づくためには若者を理解することが必要不可欠である。実習では、死にたいと思っただけの人がいない人も、想像しながら意見交換を行なった。

2.については、もしも自分が自殺したら残された家族や関係者はどうなるのか、そして自分が残される立場になったらどのような事が起こるのかを皆で想像して話し合った。柏市などの自治体では遺族のメンタルケアを行っているが、万人に効く対策方法はないので、相手の立場になって考えることが大切だといえる。

### 3. ヒアリング調査

13名の履修者がいたため、全員が集合できる日時を設定することが困難となった。そこで集まれる曜日に基づき、水曜チームと木曜チームの二手に分かれた。

水曜チームが担当したのは、麗澤大学学生相談室へのヒアリング調査である。柏市役所以外にもインタビューを依頼した理由は、麗澤大学の学生も「柏市の若者」に該当する上

に、今年からコロナによる私たちの精神面への影響は決して無視できないものであったからである。対応して頂いたのはカウンセラーの吉原啓さんである。

学生相談室の吉原さんによると、学生相談室の利用者は、例年4～5月が多く、学生の中では1年生が多い。これは、今年度は行われなかったが、学生相談室で行われる、大学生や大学生活についての授業の後に訪れる人や、入学後のアンケート結果によって送られてくる手紙の後に訪れる人が多いためである。相談内容は、同級生や家族などの対人関係の悩みが多いが、授業に出られない、やりたいことが分からないなど、内容は様々である。学生相談室は、それらの相談の答えを一方向的に教えるのではなく、一緒に考えてくれる場所である。

また、相談内容によって、吉原さん自身が暗い気持ちになったり、疲れてしまったときは、仕事が終わったら考えないようにすることや、家族と触れ合ったり、逆に一人の時間を取って気分転換をしていることを教えていただいた。

続いて、麗澤大学での自殺予防の取り組みについて尋ねた。まず、入学時に1年生アンケートを実施し、自殺に関連する質問項目のチェックを行うという。そして、オリエンテーションやホームページを通じた学生相談室の存在の周知を働きかけている。

若者の自殺率の増加について、特に今年度はコロナ禍の影響が強いとされている。それについて吉原さんは、人と人との繋がりが弱くなったことや、これからの先行きが不透明になったことなどが複合的に作用しているのでは、と私たちに話して聞かせてくれた。

最後に私たちに何ができるか、ということについて尋ねた。加えて、事前の学習で「ゲートキーパー」という言葉を知っていたので、学内で私たちがそのような役割を果たせるかどうかもお聞きした。まずは、身近な友人が精神的に参っているその兆候を見逃さないことが重要だという。ご飯を食べられているか、十分に眠れているかなど、生きていく上で必要なことができていない人は要注意だそうだ。そうした友人がいたら、学生相談室に「つなぐ」はもちろん重要だが、その部屋まで送り届けて終わり、ではなく、その友人に寄り添い続けることが大切だと教えてもらった。

そして木曜班は、柏市役所の福祉政策課へのヒアリング調査を担当した。

対応して頂いた職員の吉田さんと剣持さんにインタビューした際、コロナ禍で私たちができることについて伺った。まず、私たち学生にできることとしてゲートキーパーが挙げられる。現在、新型コロナウイルス感染症が流行る中でゲートキーパーとしてしなくてはならないことは、接点をつくることである。接点をつくる方法のひとつとして、SNSを使って発信または受信することが挙げられる。現在のコロナ禍で、直接会うことができないからこそSNSを駆使しながら、友達との関係を希薄にしないよう心掛けることが大切だと考えられる。その際にゲートキーパーが気を付けることは、悩んでいる友達や家族などの身の回りの人の変化に気づいて支える、そして悩んでいることを聞くことである。そこから相談所に話してみるなどの支援につなげることが重要となる。インタビューを聞いて、私たちも、これらのことをすることで自殺予防につながると考えた。

次に柏市の自殺予防対策での課題について尋ねた。これからはSNSなどによる情報の拡散に力を入れていきたいという。というのも、柏市福祉政策課の吉田さんにインタビュー

をした際、自殺予防の政策についての情報があまり伝わっていないと言っていた。そこで私たち学生のような若い世代の力で SNS を使い、これらの存在を広めて欲しいということであった。

私たちが広めるべき情報が主に 2 つある。1 つ目は厚生労働省の自殺防止を目的とした SNS である。そのホームページによると、これは SNS やチャットによる自殺防止の相談を行い、必要に応じて電話や対面による支援や居場所活動等へのつなぎも行うというサービスである。様々な分野の専門家及び、全国の地域拠点と連携して「生きることの包括的な支援」を行っている。2 つ目は柏市福祉政策課の Twitter である。ここでは福祉政策課の行っている政策についての情報が発信されており、自殺予防に関しても掲載されている。これらの情報を若者の力で拡散していきたい、と考えている。

#### 4. 提案内容

学生相談室と柏市福祉政策課へのインタビューに基づき、私たちは若者の自殺予防に貢献する具体的なアイデアの検討を始めた。そして、水曜チームと木曜チームが合流する形で「デスカフェ」の企画・実施をすることが決定した。

まずデスカフェとは、死について自由に語り合う場である。学生相談室も市役所も、若者に支援情報が届きにくいことを共通の課題として抱えており、まずは自分たちで、生きること死ぬこと、自殺についてオープンに話し合う機会（すなわちデスカフェ）をつくらうという議論になった。

以下はデスカフェを開催するにあたって、他所で実施されている同種のイベントにも共通していた基本的なルールである。

1. 自由に自分の考えを表現できるようにすること
2. 周囲が結論を出そうとしないこと
3. カウンセリングや悩み相談になりすぎないようにすること

デスカフェの実施は 2021 年 1 月 28 日（木）の午後 4 時半からスタートとなった。社会の状況的にオンラインでの開催となった。また「死」や「自殺」という話題自体が、心にネガティブな影響を与えることも考えられたため、学生の参加者はこうした議論に免疫のついてきた実習メンバーのみとした。ゲストには、インタビューに協力して頂いた麗澤大学学生相談室の吉原さん、柏市市役所福祉政策課の剣持さん、そして新たに元麗澤大学教授でどうかつ生と死を考える会の竹内先生をお招きした。竹内先生にはデスカフェの企画にあたって助言を頂いた。

自分たちが開催した ZOOM デスカフェでのプログラムは次の通りである。

- ・簡単な自己紹介
- ・アイスブレイク
- ・「メイン1」：自分の人生を振り返る（自分の人生の幸不幸を折れ線グラフで表現）
- ・「メイン2」：自殺をテーマにしたトピック
  - 自分が自殺したら
  - 自分が遺族になったら
  - 自分がゲートキーパーになったら
- ・共有&振り返り
- ・最後にまとめ

## 5. 連携先からのフィードバック

デスカフェに参加して頂いたゲストの3人に、オンラインでこの企画を中心に今回の実習についてのコメントを頂いた。

### (1) 吉原さん（麗澤大学学生相談室）

デスカフェに参加したメンバー同士が短い付き合いであるはずなのにも関わらず、オープンに話ができている良かった。メンバー同士が深い話ができるようになったということも一つの成果だと思う。

### (2) 剣持さん（柏市市役所）

SNS やニュースで、自殺に関する情報に触れることも多くなってきている。直接会えなくても近い人同士で助け合うことが重要。またゲートキーパー以外の自殺予防対策についてもこれから学んでほしい。

### (3) 竹内先生（麗澤大学、とうかつ生と死を考える会）

「死」から人生を見つめ、「よりよく生きる」とはどのようなことであるかを考えることのできる良いきっかけとなった。イベントそのものが「ゲートキーパー」の役割を果たす大切なものになりそうだ。また、オンラインだからこそできる機能（BGM やバーチャル背景）を駆使することができると思う。

## 6. 感想・まとめ

次の文章は、メンバーそれぞれの感想を集約したものである。

まず、実習を始めてから柏市の自殺者の現状や「ゲートキーパー」の役割の大切さを知ることができた。学内のカウンセラーや自殺予防に取り組む市の担当者といった方々へのインタビューを通じて、自殺を防ぐためには人と人の繋がりが大切であり、自分自身も家族や友達を大切にしなければいけないということを学んだ。インタビュー調査は、初めてのメンバーがほとんどだったが、貴重な時間を無駄にしないようにタイムスケジュールを作ることや、緊張していても自分の思いや考えを言葉にすることが大事だと感じた。

「若者の自殺予防」という課題に対して、私たちに何ができるか、ということを考えて末、



デスカフェという方法を選択した。オンラインでの開催となったが、自分の人生をグラフで表すとどうなるのか、自分が自殺してしまったら、といったトピックをメンバーと一緒に語り合い、生きることや死ぬことについて真剣な意見交換ができた。コロナ禍により、死を意識する場面は多くなっている。だからこそ、「死」を語り合えるこのようなカジュアルな場は多くの人に求められるのではと、デスカフェのニーズが感じられた。こうした場でのもうひとつの重要な学びは、異なる立場の人達の話聞くことで自分の考えとの違いを知り、結果的に視野が広がるということである。また、実際に言葉にして伝えようとすることで、今まで自分が思っていたことを明確にできる機会にもなった。

学生が主体となってイベントを企画するのは入学後初めてのことだったので、最初は戸惑いもあったが仲間の助けもあり、良いものになったと感じている。何を準備すればいいか、当日はどのように進行すればいいかなどの企画を練ることは、テーマの重さはさておき、楽しくもあった。この一年、大学に行くことはほとんどなかったが、お互いに他の学部の学生との繋がりができ、自分の考えを共有でき、有意義な実習となった。

## 7. デスカフェパンフレット



### 3. 「外国とつながる親子・子どもの状況調査」

担当部局：柏市子育て支援課

(1)  $\alpha$  チーム

外国語学部外国語学科

国際交流・国際協力専攻 長山 遥佳 ※チームリーダー

英語・リベラルアーツ専攻 平野 サナ

中国語・グローバルコミュニケーション専攻 鈴木 歌穂

英語コミュニケーション専攻 杉山 優斗

国際学部グローバルビジネス学科

グローバルビジネス専攻 柴田 愛里

グローバルビジネス専攻 佐藤 万宙

(2)  $\beta$  チーム

国際学部グローバルビジネス学科

グローバルビジネス専攻 鈴木 ひな ※チームリーダー

グローバルビジネス専攻 根本 伊緒里

外国語学部外国語学科

中国語・グローバルコミュニケーション専攻 鬼木 優寧

中国語・グローバルコミュニケーション専攻 佐々木 琉華

担当教員：国際学部 松島 正明

## 1. プロセス

日程	内容
2020年10月30日	第1回打ち合わせ (PPT資料)
11月18日	チーム分け ( $\alpha$ 、 $\beta$ )、リーダー決定
12月中旬	各チーム検討状況の把握
2021年1月中旬	各チーム検討状況の確認
1月下旬	同上
2021年2月3日	全体報告会

## 2. テーマの概要

- (1) 柏市在住外国人親子 (世帯) の子育て等に関する現状把握  
※外国人世帯が子育て支援に関して有するニーズ調査
- (2) 柏市役所子ども支援課が作成・配布している「子育て支援ガイドブック (2021年夏季改訂予定)」に対する、上記ニーズ調査結果のフィードバック 等

## 3. ヒアリング調査

- (1)  $\alpha$  チーム：身近な外国人に日常生活で困っていることを調査  
→ヒアリング調査した中で柏市在住外国人じゃない人もいた。また、新型コロナウイルスの影響で直接アンケートをすることができずネットでの調査になってしまう学生もいた。  
各々が調査したデータをもとに、柏市で行われている取り組みと比較して、柏市が行っている取り組みの中で外国人に足りないものを調査。
- (2)  $\beta$  チーム：新型コロナウイルスの為、対面でのヒアリング調査が難しいと判断し、SNSを駆使して調査。

## 4. 実習での取り組み、アンケート

- (1)  $\alpha$  チーム
  - ①企画の試作運営  
実施開始日：12月16日  
対象：柏市に住む外国人  
方法：SNSを活用  
内容：SNSを通して柏市に住む外国人に子育てに関する情報やその他柏市が発信する情報を届ける
- (2)  $\beta$  チーム
  - ①アンケートの実施概要  
実施期間：約2か月  
取材対象：柏市に住む外国人親子

取材方法： SNS (LINE)

取材内容： 柏市に住むにあたり子育てで困っていることはあるか

②アンケート分析

特に柏市に住むにあたり子育てで悩んでいることはなかった

## 5. 提案内容

(1)  $\alpha$  チーム

- ①SNS を活用した外国人親子からの相談窓口づくり
- ②SNS (フェイスブック) の開設と試行的運用 など

(2)  $\beta$  チーム

- ①外国人世帯 (親子) を対象とするネットワークづくり
- ②パパ・ママ学級の創設 など

## 6. 連携先からのフィードバック

(1)  $\alpha$  チーム：

- ・外国人と柏市役所をすぐに繋げられるようにすると良い。すぐに担当部署を案内できるようにする。
- ・Q&A を作って配信したらどうか。
- ・Twitter を使って外国人の声を聞くのは素敵な取り組みである。
- ・外国人が困っていることを自分たちから調査すること。

(2)  $\beta$  チーム：

- ・現状では、2年に一度「かしわこそだてハンドブック」を発行しているが、それに掲載すべき情報の精査が十分で無いため、情報を収集してほしい。

## 7. 感想・まとめ

(1)  $\alpha$  チーム：外国人親子はこんなことで困っている、こんな事を必要としている深くと考えさせられたことが多々ありました。身近な外国人親子にインタビューをさせて頂いて日本人の目線ではなく外国人の親子からの目線で見ることができ貴重な体験ができました。また、気付かされたことも多くあり、普段普通に生活していることでも日本に住んでいる外国人の方にとっては不自由と感ずることが多くあると改めてわかりました。柏市では、外国人の方へのイベントを多くやっているが、そのイベントが伝わっていなかったり、まだ改善しきれていない不自由な点が多くあることに気づけました。

(2)  $\beta$  チーム：地域連携実習を行うにあたって、メンバーで柏市に住んでいる人が居ない中、柏市に住んでいる外国人親子がどのようなことに困っているのかを調査し、困っていることをベースに柏市をよりよくする提案を皆で考えまとめる事はとても難しかったが、毎週ミーティングで話し合ったり、メンバー個人個人の意見を話し合い考えたりしていく中で問題解決能力がメンバー1人1人高まったと感じている。

(3) 担当教員所感：

- ①対面式ではなく、すべてがオンライン実施であったため、全体打ち合わせ及びチーム毎の打ち合わせに際して全員が参加できる機会が少なかった。学生と担当教員との打ち合わせも学生側の都合により一堂に会する機会が限られたため、学生の検討状況及び進捗状況の管理が円滑に行うことができず、担当教員から学生に対する助言・指導等がタイムリーに行うことが困難であった。
- ②柏市役所担当者と学生間のやり取りも市役所側のオンライン環境が未整備であったため（ZOOMでの打ち合わせは市役所内の制約により困難）、メールベースでのやり取りに限定され、円滑かつ効果的な意見交換等には至らなかった。
- ③学生間のやり取りもメール、ライン等を通じて行われていたが、タイムリーな意見交換や活発なディスカッションには至らず、各リーダーの負担が重かったように感じられる。
- ④ゼミ開始前の担当教員と市役所側との打ち合わせの結果、市役所側ニーズは柏市内在住の外国人が如何なるサービスを有するかを把握して欲しい由であったが、コロナ禍により学生周辺の外国人自体が減少したこと、学生が実際に市内各所で外国人親子等に対するヒアリングを行うことが困難であったこと等により、学生のグループワーク及び具体策の検討が非常に困難であった。
- ⑤一部学生の個人的事情により、チームリーダーの交代が急遽発生する事態となり、チームワークに支障が生じたことは残念である。

## 8. 成果物添付

(1) α チーム：

～調査結果～

※下線が引かれているのは柏市が抱えていると思われる問題

- ①手続きに関する重要なことがひとまとめになっている本が世田谷区にはある。

→柏市には、子育て支援ブックがある。

- ②地震とかが起きたときの対応が不安

→子育て支援ブックには避難場所が描かれていないので外国人は避難場所を知らないのではないか？

外国人のための避難訓練（不定期）に行われている。

避難場所での言語対応はできている。

防災マップ・ハンドマップは多言語対応されている。また、希望者に配布。

- ③母国語の情報が少ない・緊急放送など（英語がほしい）

→市内放送が日本語のみ

柏市 HP は外国語対応している。

ツイッターが英語対応できると良い。

インスタがあつたらいい（外国語対応）→情報発信・画像で簡単に説明できる・言葉がいらぬ。

- ④銀行とかで実際に日本語以外で話せる人がいない。  
→柏市から銀行にアドバイスはできる。けれど、柏市はそれだけしかできない。  
柏市が銀行について解説してくれる→その取り組みがあまり知られていないので宣伝してほしい。
- ⑤田舎になればなるほど英語表記が無くなる→問題なさそう  
→柏駅周辺は大丈夫そう。
- ⑥申込用紙とかお知らせの情報をルビ付きの日本語でほしい。  
→日本語のHPにルビがあると良い。  
事前によく使う日本語を解説されていると、ルビがなくても外国人は、対処できる。
- ⑦イスラム教など宗教に関することを日本語で説明できない。  
→学校には、ALTがいるから英語で何とかなる。  
子育て支援ブックに宗教のことが載っていると良い。  
宗教に関する理解・対応できるためのガイドブックがあると良い。
- ⑧書類が日本語ばかりで理解ができない→柏市は英語対応で補っている。  
→事前によく使う日本語を解説してあげると良い。5番と同じ対応。
- ⑨新型コロナの影響で学校に行けない。日本語の情報が何もわからない。  
→相談室にもっていけば対応してくれる。  
曜日と言語が決まっていますすぐに相談できない。  
学校関連のことで対応できる場所があると良い。

(2) βチーム：プレゼン資料



## 4 (1). カシワワカモノプロジェクト (Aグループ)

担当部局：柏市協働推進課

国際学部グローバルビジネス学科

グローバルビジネス専攻 武藤 一新 ※グループリーダー

グローバルビジネス専攻 細谷 アン

経済学部

経済学科観光・地域創生専攻 金子 実央

経済学科観光・地域創生専攻 今西 海斗

経営学科スポーツビジネス専攻 佐藤 史也

経済学科経済専攻 大越 玲

経営学科経営専攻 靖 エイ

担当教員 経済学部 大野 正英

## 1. プロセス

日程	内容
12月17日	第1回ミーティング ・顔合わせ、自己紹介
12月21日	第2回ミーティング ・ブレインストーミング
12月23日	第3回ミーティング ・ブラッシュアップ、情報収集
1月7日	第4回ミーティング ・プレゼンスライド作成
1月13日	第5回ミーティング ・プレゼン原稿読み合わせ
1月22日	第6回ミーティング ・グループ最終調整
1月29日	第7回ミーティング ・教授との最終確認
2月3日	全体報告会

## 2. テーマの概要

柏市協働推進課からは次のようなテーマが提示された。

「柏の若者が集い、集まれるイベントや企画を考えてほしい。特にコロナ禍という状況の中で、若者のつながりを築くためにどうすればよいかという視点を取り入れてほしい。」

これまで柏市ではカシワワカモノプロジェクトという形で、若者が中心になって街を盛り上げていく動きができていたが、2020年度はすべての計画が中止になり、活動が中止になっていることが、この課題の背景にある。

## 3. 提案内容

### (1) 採用された3案

#### ①キャンプとキャンドルナイトを融合させたイベント

お昼にキャンプを行い、企業様に協力を仰いでキャンドル作りをし、夜は手作りのキャンドルを灯す。協力作業から交流を図り、キャンドル作りで思い出を残すことが目的である。メリットは豊かな自然から非日常を味わえることで癒しを得ること。ターゲット層はフットワークの軽い若年層やファミリー層などに絞って計画した。グループ内で想定された2つの懸念点とその対策について、1つ目は、宿泊を想定しているため参加費用がかさむことがあげられたが、団体料金の利用や持ち込み可能なキャンプ場を選択することで対応しようと考えた。2つ目はキャンドル作りで企業様に協力が得られなかった場合、自分たちでキャンドルの作り方を学び、教えることで経験と思い出作りに繋がると考えた。



## ②大堀川のライトアップイベント

大堀川の桜並木をライトアップする。地域活性化につなげ、柏市の魅力を広げること、大堀川の桜並木の美しさをたくさんの人に知ってもらうことが目的である。メリットは美しい景観を活かすことができることと若者に SNS 映えを提供でき、それが宣伝に繋がることだ。グループ内で想定された3つの懸念点とその対策について、1つ目は準備に時間がかかることがあげられたが、SNS や近隣の学校などでボランティアを募集することで対応しようと考えた。2つ目は電気代がかかることがあげられたが、使用する LED ライトや発電機は購入するのではなく、レンタルすることで対策しようと考えた。3つ目は近所迷惑になる可能性があることがあげられたが、騒音対策やゴミ箱の設置により対策しようと考えた。

## ③スポーツとバーベキューを融合させたイベント

日中にスポーツを企画し、夜は BBQ を行う。コロナ渦における運動不足の解消と BBQ で交流を深めることが目的である。メリットはスポーツを通して面識が増える、運動不足の解消、自律性と協調性の向上の3つがあげられる。必要な準備として場所の確保、スポーツ用具や水分、食材の確保があげられる。グループ内であげられた3つの懸念点と対策について、1つ目は参加費用について、持ち込み可能なバーベキュー場やレストランで代替可能であると対策した。2つ目は悪天候が懸念されるが、屋内バーベキューや、店内飲食の検討、体育館で代替することを対策としてあげた。3つ目はコロナ感染対策として屋外での活動により3密を避けることが可能であると考えた。

## (2) 初期提案8案

- |           |                     |
|-----------|---------------------|
| ①糸電話カフェ   | 密を避けてのカフェの開催        |
| ②わんわんらんど  | 動物と触れ合い交流を深める       |
| ③きもだめし    | イベント形式でアクティビティを楽しむ  |
| ④コリアンフェス  | 多文化理解を進めて交流を深める     |
| ⑤柏レイソル応援会 | 地元のサッカークラブを応援する交流会  |
| ⑥Zoom 交流会 | オンラインで学生で交流を深める     |
| ⑦中華食イベント  | 多文化理解を進めて交流を深める     |
| ⑧野外フェス    | 柏市での野外フェスで地域活性化をはかる |

## 4. 感想・まとめ

今回のプロジェクトに対する感想についてリーダーである武藤がまとめさせていただきます。まず、今回のプロジェクトは柏市役所の担当職員の方から、本当に自由な発想で自由に提案していただきたいと言うふうに話していただきました。9月からではなく12月からのスタートだったので少し時間がない状態でグループワークを進めていきました。1週間に1回を基準にオンライン(SNS や Zoom)で集合しました。ほぼ全員が初対面で、かつオンラインだったので、グループワークやコミュニケーションに少し不安がありましたが、メンバーの集合率も良くかなり順調にグループワークを進めることができました。全体で約11個ほど

の提案がされました。そこから組み合わせや消去法などで絞っていきました。プレゼンテーションの原稿は全体で共有して、それぞれ興味のある分野やそれぞれで調べてもらったイベントについて発表してもらおうという形をとりました。最終プレゼンは2月3日なのでまだ終わっていませんが、非常に良いグループで良いプレゼンテーションを完成させることができたと思います。柏市役所の方にも発表する機会を設けていただいたので、自分たちのアイデアをしっかりと伝えられるように練習しました。

## 5. プレゼンテーション資料



## 4 (2). カシワワカモノプロジェクト (Bグループ)

担当部局：柏市協働推進課

経済学部経済学科

観光地域創生専攻

吉田 悠太 ※グループリーダー

観光地域創生専攻

杉山 直輝

経済専攻

杉坂 侑紀

経済専攻

寺田 明代

経営学科経営専攻

米田 貴哉

国際学部グローバルビジネス学科

グローバルビジネス専攻

日江井 麻紗子

担当教員 経済学部 大野正英

## 1. プロセス

日程	内容
12月17日	第1回グループワーク ・顔合わせ ・自己紹介
12月26日	第2回ミーティング ・企画考案
12月27日～1月5日	定期ミーティング ・企画考案
1月12日	第3回ミーティング ・案1のパワーポイント作成
1月15日	第4回ミーティング ・案1のパワーポイント作成
1月21日	第5回ミーティング ・案2のパワーポイント作成
1月23日	第6回ミーティング ・案3のパワーポイント作成
1月27日	第7回ミーティング ・最終確認
1月29日	グループ内発表会
2月3日	全体発表会

## 2. テーマの概要

柏市協働推進課からは次のようなテーマが提示された。

「柏の若者が集い、集まれるイベントや企画を考えてほしい。特にコロナ禍という状況の中で、若者のつながりを築くためにどうすればよいかという視点を取り入れてほしい。」

これまで柏市ではカシワワカモノプロジェクトという形で、若者が中心になって街を盛り上げていく動きができていたが、2020年度はすべての計画が中止になり、活動が中止になっていることが、この課題の背景にある。

昨年からの新型コロナウイルスの流行における柏市内の若者同士のコミュニケーションの難しさから、コロナ禍におけるコミュニケーションを取る機会の提供や、若者同士の繋がりの創生を目的とし、カシワワカモノプロジェクトでの企画とする。

## 3. 取り組みの概要

我々はまずメンバー6人を2つのグループに分けそれぞれで案とその内容をある程度決め、その後全員で集まって案を絞っていきました。また、全体で話し合う時はリーダー、補佐、書記2人、スライド作成係2人とそれぞれに役割を決め、最低リーダーか補佐のどちら

かと書記、スライド作成係のそれぞれ1人の3人が集まれば会議が成立する仕組みにしました。会議では主に提案された案をより深く、より伝わりやすく、より現実的かどうかを心掛けて話し合いをしました。

没になった案：オンライン飲み会、オンライン人狼ゲーム、ホワイト餃子大食いイベント  
柏市を拠点としたオンラインリアル脱出ゲーム

#### 4. 提案内容

(1) 高校生同士のオンラインクイズ大会の実施

柏市にゆかりのある著名人を呼び、市内の高校生と一緒にクイズ大会をしてもらう。

(2) 非接触型 AR スポーツ HADO の体験会

千葉県内に体験する場所がない HADO を体験してもらうイベント

(3) 高校生のよる商品の企画体験

柏市内の高校生とカフェやスイーツ店がコラボして商品開発

#### 5. 感想・まとめ

新型コロナウイルスの流行という未曾有の事態の発生により対面での接触を控えることが余儀なくされた中で、対面でのイベント企画とは異なり、オンライン上でのイベント開催がいかに難しいのかというものを肌にした。私たちのプロジェクトは若者同士のつながりをどのように作っていくのかという問題解決を求められた中で、SNSの有効活用が必要不可欠なものと考え、どのように使っていくのがポイントだと感じた。

#### 6. プレゼンテーション資料



## 5. 男女共同参画推進事業

担当部局：柏市協働推進課

### 経済学部経済学科

観光・地域創生専攻	熊谷 安香音
観光・地域創生専攻	杉本 奨斗 ※リーダー
観光・地域創生専攻	鈴木 彩夏
観光・地域創生専攻	田中 凜太郎
経済専攻	坂本 大吾

### 国際学部国際学科

国際交流・国際協力専攻	竹田 光璃
国際交流・国際協力専攻	水野 華乃音
国際交流・国際協力専攻	坂井 柚葉

### 外国語学部外国語学科

英語コミュニケーション専攻	齋藤 優奈
英語コミュニケーション専攻	前田 智香
中国語グローバルコミュニケーション専攻	高橋 龍生
中国語グローバルコミュニケーション専攻	宮本 有芽 ※サブリーダー
中国語グローバルコミュニケーション専攻	横井 悠太

担当教員 国際学部 大場 裕之

## 1. プロセス

日程	内容
10月30日	第1回ミーティング ・顔合わせ ・自己紹介
11月6日	第2回 ミーティング ・顔合わせ ・予定決め
11月13日	第3回 ミーティング ・実際に共創空間を用いて意見交換を試みる
11月14日	パレット柏にて共創空間を用いイベント開催（4年生主催）
11月20日～ 11月27日 金曜日（昼休み）	定期ミーティング ・共創空間に慣れる
12月2日～ 12月9日 水曜日（2限）	定期ミーティング ・「家事労働に対する価値観」について共創空間を用い問題提起
12月11日～ 12月18日 毎週水曜日（2限） 金曜日（昼休み）	定期ミーティング ・男女共同参画と AI を結びつけ、共創空間を用い問題提起・解決を図る
1月5日	パレット柏にて説明会
1月13日 水曜日（2限）	定期ミーティング ・報告会に向けテーマ固め
1月25日～ 2月1日 平日 10：30～ 12：00	定期ミーティング ・「AI と家庭改革」に着目し、意見交換 ・問題提起・アクションプラン ・報告会に向けプレゼンテーションの準備
2月2日	定期ミーティング ・報告会に向けた最終準備
2月3日	全体報告会

## 2. テーマの概要

「男女共同参画社会を実現する」というテーマを軸に共創空間を用い、話し合う。

### 〈共創空間で話し合った内容〉

- ・家事労働に対する夫婦の価値観
- ・自分は家事をしたいか
- ・管理職になりたいか
- ・男性の育休取得に関して
- ・女性の社会進出
- ・AI ロボットに育児を任せるか
- ・家庭改革にAI ロボットを導入する〔報告会のテーマ〕

## 3. 実施したイベントについて

### (1) 11月14日に行われた柏市男女共同参画フォーラムについて

このイベントは、麗澤大学の4年生が中心となって開催したもので、一般の方や学生、柏市役所の方達と一緒に共創空間を用いて意見交換をした。今回の議題は、結婚した夫婦の問題について、「男性に家事・育児をしてもらいたい女性」「男性に家事・育児をしてもらいたくない女性」「家事・育児をしたい男性」「家事・育児をしたくない男性」のそれぞれが共に生活するためにはどうするかについて、問題点を挙げアクションプラン（解決策）を考えた。

### (2) 1月5日に行われた柏市の協働推進課の取り組みの説明会について

1月5日にパレット柏で柏市の協働推進課の伊東様から、柏市の取り組みについてお話を伺った。柏市の取り組みは「無意識の偏見の排除」を目的としており、男はこうあるべき、女はこうあるべきという固定観念を取り払った暮らしを目指している。具体的な活動も聞くことができ、例えば男女の制服は、性別に関わらずズボン又はスカートを選べるようにする活動や、LGBTの方に「パートナーシップ協定」というものを提案し、家族とは認められないが、パートナーという形をとる活動のお話を伺うことができた。また男女だけでなく、在住外国人の方や障がいのある方にも、1人の人として平等に生活を送れるようにできるようサポートする活動も行っている。

そして、柏市が思う誰もが生きやすい社会とは、男女差に関係なく生活できる社会であると仰っていた。

## 4. 報告会に向けた活動内容（1月25日～2月2日）

### ● 1月25日 報告会のテーマ決め

主な活動：「家庭改革をAIロボットと共に」という課題を提示。

なぜ家庭改革に着目したのかの理由付け。

家庭改革にAIを導入することについて意見交換。（1）

方 法： 共創空間。zoomのホワイトボード共有機能を使い意見を共有。



- 1月26日 意見交換、A～Dの特徴を考える  
 主な活動：家庭改革にAIを導入することについて意見交換。(2)  
 ブレックアウトルームに分かれ、A～Dのメリット・デメリット、ネーミングを考える。  
 A, Bタイプのメリット・デメリットを全体で共有。  
 方 法：共創空間。zoomのホワイトボード共有機能を使い意見を共有。
- 1月27日 A～Dの特徴を考える、A～Dの問題点・アクションプラン提示  
 主な活動：C, Dタイプのメリット・デメリットを全体で共有。  
 A, Bタイプの問題点挙げ、それに対するアクションプランを考える。  
 方 法：zoomのホワイトボード共有機能を使い意見を共有。
- 1月28日 A～Dの問題点・アクションプラン提示  
 主な活動：Cタイプの問題点を挙げ、それに対するアクションプランを考える。  
 方 法： zoomのホワイトボード共有機能を使い意見を共有。
- 1月29日 A～Dの問題点・アクションプラン提示、報告会に向け準備  
 主な活動：Dタイプの問題点を挙げ、それに対するアクションプランを考える。  
 方 法：zoomのホワイトボード共有機能を使い意見を共有。
- 1月30日・31日 各グループに分かれプレゼンの準備
- 2月1日 報告会の発表に向け全体準備  
 主な活動：パワーポイントを用いて考えをまとめる。  
 方 法：各自で用意したパワーポイントを共有。
- 2月2日 最終ミーティング  
 主な活動：4年生の先輩に活動報告を発表。  
 方 法：各自で用意したパワーポイントを共有。

## 5. 「家庭改革をAIロボットと共に」というテーマの経緯

男女共同参画推進事業は、社会にある男女の偏見をなくし、男性・女性それぞれが共同して活躍できる社会を実現する、ことを目標に話し合ってきました。話し合いの中で、そのような社会を実現するためには「女性の社会進出」が重要だという意見が挙がりました。

次に男女共同参画推進事業は「どうすれば女性が社会に進出できるか」について共創空間を用い、いくつかテーマを挙げ意見を交換しました。例えば女性の管理職の割合が低いことをテーマに「自分が将来管理職に就きたいか」についての意見交換や、男性の育休取得率が低いことをテーマに「男性に育休を取って欲しいか、男性は育休を取りたいか」について意

見交換をしました。

話し合いを進める中で、女性が社会に進出するためには男性と協力して家事・育児をすることが大切だ、という結論を導きました。そこで次に我々は、男性と女性が協力して家事・育児をするために、家庭改革に着目し、共創空間を用い意見を交換しました。また近頃では家事・育児の場面に AI が進出していることについて考え、家庭改革と AI を結びつけ最終的なテーマとしてまとめました。

## 6. 感想・まとめ

「男女共同参画社会」を真に実現することは非常に大きな課題です。私たちも複数のテーマについて話し合い、何度も意見交換しましたが、具体的な解決策を挙げることはできませんでした。ですが私たちは、結果ではなく、意見交換から解決策に至るまでの過程を重視して活動しました。

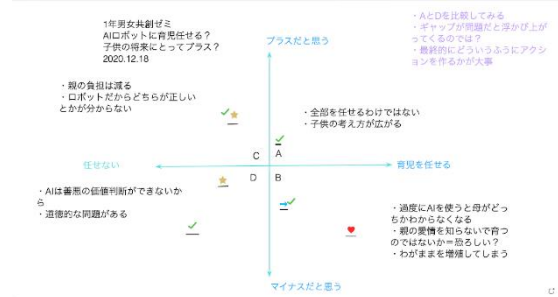
私は男女共同参画推進プロジェクトを通して、「女性だから・・・」という固定観念を打破する機会になったと思います。最近世の中で「女性の社会進出」「男女平等」などの言葉をよく耳にするようになりました。ですが未だに女性が内、男性が外という考え方は根強く残っており、実際私も「自分は女だから、将来は家事・育児をしなければならない」という考えがありました。ですが今回、共創空間を用いた活動を通して、偏見や固定観念に縛られず意見を出すことで、自分の中にあつた固定観念を改めるきっかけになったと思います。また、自分と違う考えを持つ人の意見を聞くことができ、多様な視点から物事を解決する方法を学ぶこともできました。

男女共同参画推進プロジェクトを通して、自分が将来家事・育児をどのようにこなすかについて考えることができたので、実際に家庭を持つときにプラスになる活動だったと思います。

## 7. 「家庭改革を AI と共に」の共創空間

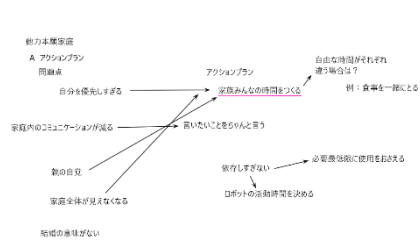


MIKO の CM を初めて見たときの共創空間

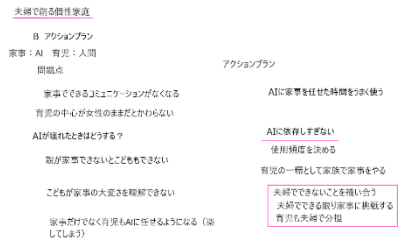


AI ロボットに育児を任せることについて

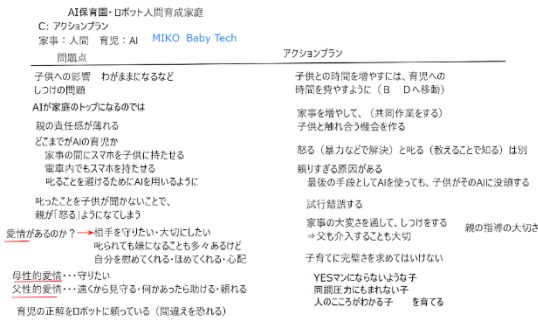




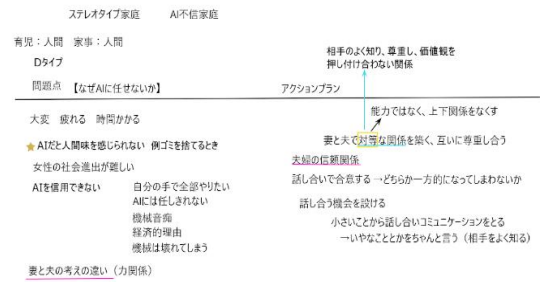
### A タイプ [問題点・アクションプラン]



### B タイプ [問題点・アクションプラン]



### C タイプ [問題点・アクションプラン]



### D タイプ [問題点・アクションプラン]

## 6. 「えんとつ町のプペル」バス個展開催に向けて

### 麗澤校友会

#### 幼稚園班

国際学部国際学科

国際交流・国際力専攻

入田 鈴音

国際交流・国際協力専攻

殖木 美桜

日本学・国際コミュニケーション専攻

大塚 優真

#### 中学高校班

国際学部グローバルビジネス学科

グローバルビジネス専攻

杉山 真優

国際学部国際学科

国際交流・国際協力専攻

野土谷 珠美

国際交流・国際協力専攻

早坂 梨彩

国際交流・国際協力専攻

渡辺 裕斗

#### 大学近隣班

経済学部経営学科

経営専攻

勝山 朋美

経済学部経済学科

経済専攻

高橋 菜々

観光・地域創生専攻

柴田 ゆかり

外国語学部外国語学科

中国語・グローバルコミュニケーション専攻

細貝 季来

ドイツ語・ドイツ文化専攻

山極 梓乃

#### グッズ班

国際学部グローバルビジネス学科

グローバルビジネス専攻

神田 佳澄

国際学部国際学科

国際交流・国際協力専攻

駒田 仁

国際交流・国際協力専攻

橋本 涼加

外国語学部外国語学科

中国語・グローバルコミュニケーション専攻

椎名 日向子

英語コミュニケーション専攻

初川 真梨乃

担当教員 国際学部 黒須 里美

## 1. プロセス

日程	内容
2020年10月29日～	Google Classroomにて自己紹介開始
10月31日	顔合わせ①@Halloween
11月18日	顔合わせ②
11月23日	全体ミーティング① ・今後の方向性をどうするか
11月30日	全体ミーティング② ・どんな分野ごとに分けていくか ・各グループの目標確認
12月3日	全体ミーティング③ ・グループメンバー決定 ・各グループのコンタクト先紹介
12月8日	全体ミーティング④ ・今までの活動報告 ・今後の活動に関する打ち合わせ
12月14日	絵本読み聞かせ@「多文化共生A」の授業 ・絵本の影響力は大きいのか ・多言語で感じる受け取り方の違い 中学高校班ミーティング① ・麗澤中学高校教員秋元先生とのアイデア共有
12月15日	グッズ班ミーティング ・廣池学園職員麗澤大学麗澤会事務局長松野さんとのアイデア共有
12月17日	幼稚園班ミーティング① ・麗澤幼稚園職員服部さんとの打ち合せ
12月18日	大学近隣班ミーティング① ・大学事務局アドミッション&PRセンター長尾さんとのアイデア共有
12月22日	全体ミーティング⑤ ・活動報告 ・映画の公開と絵本の違い 中学高校班ミーティング② ・秋元先生とのアイデア調整
2021年1月7日	全体ミーティング⑥ ・活動報告 ・バス招致場所に関する話し合い
1月9日～	映画チケット配布者向けアンケート配信
1月14日	メーリングリスト作成 <a href="mailto:poupelle@reitaku-u.ac.jp">poupelle@reitaku-u.ac.jp</a>
1月21日	大学近隣班環境問題講座 ・経済学部籠先生によるオンライン講座 ・柏市の環境問題や自然環境に関して
1月22日	大学近隣班ミーティング② ・長尾さんとのアイデア共有
1月25日	幼稚園班ミーティング② ・アイデア共有
1月26日	麗澤校友会へのプレゼン
1月30日	幼稚園班ミーティング③ ・アイデア共有

1月31日	全体ミーティング⑦ ・各班意見共有 中学高校班ミーティング③ ・れいこう麗澤会理事重松さんとのアイデア共有
2月2日	全体ミーティング⑧ ・最終確認
2月3日	全体報告会

上記含め幼稚園班3回、中学高校班7回、大学近隣班8回、グッズ班6回のミーティングを行っている。

## 2. テーマ概要

「えんとつ町のプペル」という絵本は、キングコング西野亮廣さんによって書かれた物語で、ゴミ山から生まれたゴミ人間プペルと星を信じる、えんとつ掃除屋の少年ルビッチの物語である。この絵本を題材とした「えんとつ町のプペル光る絵本展」とは、バス型の光る絵本展だ。展覧会に行くことができない子どもたちへ「展覧会から会いに行こう!」という想いから始まった企画である。

2021年5月21日-22日にこの展覧会が麗澤のキャンパスで開催される。この企画を通じて、麗澤のキャンパスで青春を過ごした先輩方、現在を過ごす私たち、そして未来に笑いあう子どもたちをつなぐこと、夢と希望を地域に発信し、交流を深めるために私たちができることを考える。

## 3. 事前調査

### (1) 事前調査実施概要

#### ①「多文化共生A」での絵本読み聞かせ

実施日程：2020/12/14(月) 4限

調査対象：「多文化共生A」履修者

調査目的：・絵本にみる多文化共生(授業の目標)  
・私たちと同世代にみんなが絵本にもつ感想を探る

調査方法：Zoomを用いたオンライン

調査内容：・授業内で読み聞かせを行う  
・感じたこと、考えたことをディスカッションする  
・授業後に感想を書いてもらう

#### ②映画や絵本の感想アンケート調査

実施期間：2021/1/9～(調査継続中)

調査対象：映画チケット配布者

調査目的：・この作品において多くの人が注目する点はどこか  
・たくさんのメッセージの中で心に響くものは何か

調査方法：Google フォーム

調査内容：・性別  
・年代  
・麗澤での関係部署  
・映画を鑑賞したかどうか  
・絵本を読んだかどうか  
・映画もしくは絵本で印象に残ったこと  
・伝わってきたメッセージ

#### ③思い出の場所アンケート調査

実施期間：2021/2/1～3/21(予定)

調査対象：麗澤大学・中高卒業生、および教職員・関係者

調査目的：・私たちが知らないキャンパスの魅力を知るため  
・卒業生や教職員の皆さんに企画を知ってもらい、関心をもって

もらうため

調査方法：Google フォーム

調査内容：・性別

・年代

・廣池学園キャンパス内の思い出の場所

・その場所にまつわるエピソード

(2)分析(詳細資料は資料①②として添付)

- ①・絵本読み聞かせをすることで客観的に内容を把握できた
  - ・絵本読み聞かせは幼児だけでなく大学生にも効果的だった
  - ・自分たちのみでは気づかされた視点を発見した
  - ・日本語学習者でも母語での朗読は内容理解がしやすく、感情移入がしやすかった
- ②・画像や映像のきれいさに心奪われている人が多かった
  - ・仲間というキーワードに焦点を当てた意見が多かった

(2021/2/1 時点での集計)

#### 4. 企画提案

##### ① 幼稚園班

プペルバス企画に携わる方々の思いを感じ、子どもたち自身が「感謝」をお返しする橋渡しをしたいという願いをもって企画した。また、スタンプラリーなどの体験型イベントを実施し、えんとつ町のプペルに関心を持つきっかけを作り、参加したいと思ってもらえるような企画を考えた。

・絵本よみきかせ会

麗澤幼稚園生年長 65 名をターゲットに、中高生の有志メンバーと大学生で行う。

場所：園内のホール

方法：生演奏による BGM、プロジェクター、マイクを活用

・みんなでプペルダンス！

よみきかせ会と同日に、会を盛り上げる一環として行う。

参考動画→<https://youtu.be/Po1uKb1lxn8>

・お絵描きポスター

年長を対象に、「自分の大切なもの」をテーマに自由に絵を書いてもらう。

年中、年少を対象に、プペルの塗り絵を行ってもらう。

→園児の作品は、敷地内に掲示予定

・スタンプラリー

バスが来る当日、2021/5/21-22 にスタンプラリーを開催

詳細：バスを最終目的地とし、ルートを複数用意する。

園児は、班ごとにわかれ、各班先生 1 人、大学生 1 人が引率する

・「ありがとう」をつたえる

園児たちから、プペルバスが来られるようにしてくれた方々へ、

「ありがとう」を伝える。

1. プペルにも出てくる”ホシ”に見立てた花”ペンタス”を園内で育てる。

2. バス関係者の方に、お手紙を書いてもらう。

3. 育てた花を、押し花として添えて、手紙を私達が届ける。

##### ② 中学高校班

この企画を通して、中学生・高校生もわたしたちと共にこの企画を運営し、れいたくを繋げる側(そして一緒に企画する側)として活動して、れいたく全体を繋げる活動になれるような企画を考えた。

【中学 1 年生・2 年生】

英語を使ったアプローチを検討中



### 【中学3年生】

1. 秋元先生が中学3年生に行っている言語技術の授業で、プペルの絵本を扱ってもらう
2. 授業時間を使って、この企画に協力してもらう
  - 2.1 中3の美術と書道の授業で絵本を作成（各クラス一冊作成）
  - 2.2 有志と放送委員の体育祭アナウンス希望者が幼稚園で読みきかせ
  - 2.3 作成した絵本を、幼稚園、麗しの杜、中学校舎、高校校舎に届ける。
  - 2.4 バス当日、その4冊をバスの横に掲示する。

### 【高校生】

1. プペルバス企画を盛り上げる作品を、美術、書道、音楽の授業でつくってもらう。
  - 美術：学年ごとに、各れいたく（幼稚園、麗しの杜、中高）に向けた装飾、モニュメント、パネル。当日は会場に設置。  
プペルWEEKにみんなで身に付けられるものの製作。
  - 書道：招待状の作成、スタンプラリー会場の看板、案内板の製作。  
各れいたくに飾る、セリフを書いたポスターの作成
  - 音楽：映画主題歌「えんとつ町のプペル」を合唱、それを録音。  
当日、会場で流す。

### 【中高全体】

1. プペルWEEKを開催する
  - 1.1 バスが来る前の1週間前である、2021/5/14～始める  
昼休み、放課後に、映画主題歌「えんとつ町のプペル」を校内放送で流す。  
高校生の製作品を展示する。プペルグッズを生徒、先生方みんなで身に付ける。

## ③ 大学近隣班

夢と希望を届けたいという思いを軸に企画した。自分たちが通う麗澤大学を見つめ直し、地域へ麗澤大学を発信することと、他の班が目目していない絵本のテーマである環境問題に焦点を当てて企画を考えた。また、未就学児とその家族にも興味を持ってもらえるよう工夫した。

#### ・動画作成

大学生にとってSNSはなくてはならないツールである。加えて多くの人コロナウイルス感染拡大によっておうち時間が増えたことを踏まえ、手軽かつ誰でも簡単に見ることができるためSNSを活用しようと思った。動画によって多くの人にアプローチをかけることでイフルエンサーの役割を果たし、企画を盛り上げられるのではないかと考える。

具体的には、麗澤大学のキャンパスの自然と広大さを紹介するためにプペルバス誘致する中央広場の紹介をする。他にも多言語による絵本読み聞かせで、グローバルな学びの展開をアピールしたいと考えている。

#### ・スタンプラリーポイント案とパネル展示(幼稚園班とのタイアップ企画)

スタンプラリーのポイントとして思い出の場所アンケート調査の結果を活用する。募集した思い出の場所をめぐること私たちの知らないキャンパスの魅力を見つめたい。

パネル展示をするにあたって、籠先生に柏市の環境問題や自然についてお話を伺った。絵本の中に隠されたキーワードである環境問題に焦点を当てる目的がある。

#### ・モニュメント作成

小さな風船型の紙に共通したテーマに関するコメントや絵を書いて貼り、大きなモニュメントを完成させる企画である。スーパーや公民館に協力を依頼する予定。絵本と触れ合う機会の最も多いとされる未就学児とその家族、SNSを利用しない人、高齢者など幅広い世代の方々に参加してもらおう。

#### ④ グッズ班

この企画を通して、小さい子どもたちに楽しみながら夢や希望を記憶に残るものを届けたいと考えた。モノに残る形でプレゼントするには、どんなものを作ったら子供たちを笑顔にできるのかを想像しながら企画した。

- ・メインターゲットを来場予定の小さい子に絞り以下の6つを発案。
  - ・ペンダントとブレスレット  
絵本と映画、それぞれで鍵となる2つをスタンプラリーの景品として用意
  - ・ポストカードとキャラクターを模したマスク  
麗澤大学とえんとつ町のプペルのコラボポストカードの作成。  
コロナ禍を懸念しキャラクターを模したマスクの作成。
  - ・絵本の販売  
絵本を持ってない、映画しか知らない観てない方を対象に販売。
  - ・塗り絵  
プペルバスの近くに塗り絵ブースを設け自由に描いてもらう。
  - ・顔出しパネルとバス停の作成  
キャラクターを模した顔出しパネルを記念撮影用に作成。  
全国を巡行しているプペルバスが麗澤大学に停まると考えバス停を設置。
  - ・風船  
絵本と映画で共に数多く出てきた風船を当日の会場に飾り付けることで世界観を再現。

当日を迎えるにあたり必要であれば追加も考える。

予算については他班の企画が決まりおおよその来場予定人数が把握でき次第は発注数を決めるため未定。

#### 5. 今後の活動

ボランティア募集

上記企画の具体的計画、予算化と実施

5/21. 22のバス個展開催時の運営

#### 6. フィードバック（麗澤校友会より）

- ・ 大学、中高、そして幼稚園までも含めた「麗澤コミュニティ」と、卒業生・在校生・教職員までも視野に入れた企画が満載で、その成果が大いに期待できる
- ・ 中高・幼稚園などでの読み聞かせや授業展開については、それぞれの目的と授業とのつながりを明確にし、教職員の皆さんとの連携を大切に進めてほしい
- ・ 大学近隣ということで柏市までを視野に入れた展開を検討しても良いのではないかと
- ・ 地域連携授業終了後、より具体的な計画や評価方法なども検討しつつ、本格的な活動につなげていくことをめざしてほしい
- ・ コロナ禍の今だからこそ大切な夢と希望を持てるようなイベントにしよう！

#### 7. まとめ

実際に顔を合わせて話し合うことができないという厳しい環境に加え、ほとんどが初対面という状況に最初は不安だらけであった。しかし、メンバーと意見をかわし、話し合いを重ねるうちに、不安はどこかへ消え去って大きな期待へと変わっていた。今回、多くの皆さまへ向けてメンバーの思いがいっぱい詰まった企画を発表できることがとても誇らし

い。この企画を通してどんな状況の中でも自分たちのやりぬく思いがあればなんでもできると考えたことが大きな財産になった。

また、この「信じぬく」というテーマは絵本が私たちに教えてくれたことでもある。この思いも個展で多くの人に届けることができるように5/21-22に開催に向けてメンバーと共に最後まで駆けぬけていきたい。

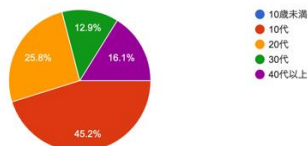
## 8. 参考資料

資料①「多文化共生A」での絵本読み聞かせ 感想（一部抜粋）

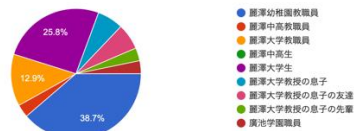
1. 多文化社会を生きるためには、自分と違う人を認め、他人に流されないように自分をしっかり持つということ、この絵本から学びました。
2. 安全確保に必死で未来を恐れている・・・どこか現代社会に似た部分があるような気がしました。みんな自分の安定した地位が欲しくて、一定のところまでいくと満足してしまう。自分はこの程度だと。しかし、世の中の成功していると呼ばれる人は現状に満足せず進み続ける人ばかりである。そんなこともこの絵本で教えてもらえた気がしました。
3. 「えんとつ町のプペル」はとても感動する作品だった。最初の「信じぬくんだ。たとえひとりになっても」という言葉から始まり、途中では周りの批判的な声もあり、1度は父からの言葉を忘れてしまったルビッチだったが、最後にプペルの招待を知り、父からの言葉の大切を知ることが出来た。このストーリーからは色々なものを得ることが出来ると思う。いじめや、仲間はずれにされることの辛さ、それをかばう者の辛さ、物事を信じてみることの大切さや身近にあるものの大切さ、など。これは絵本だけど、子供だけでなく大人でも改めて大切なことに気付かされる作品だと思った。
4. えんとつ町のプペルという話を読み聞かせを通して聞くことができ本当によかったです。とても感情移入がしやすいと感じました。ブレイクアートルームで様々な意見がありました。えんとつの煙で空が見えない世界、ゴミが大量に捨てられている世界が私たちにもどういふものなのか簡単に想像できるような気がしました。
5. プペルはみんなに嫌われるゴミ人間。みんながプペルを避けていじめる。・・・目に見えるものだけが真実ではなくて、その奥には優しさがありそれに気がついたとき本当のその人の姿がわかるんだと思いました。
6. 留学生の母国語で読み直す時間は、今までには経験したことのないような国際性を直に感じることができました。
7. えんとつ町のプペルを原点に、「麗澤大学の多文化共生A」でしかできない多言語による読み聞かせは、今まで体験した授業の中で一番心に残る授業でした。またそれぞれ違う言語で読み方の特徴や抑揚も全く違うことを知ることができました。とても貴重な時間を過ごせたと思います。
8. 絵本にはその国の文化や価値観が凝縮されていて、色んな国の絵本を読むことで日本とは違う感性や文化に触れることができ、お互いの理解が進むことによってグローバル感覚が形成されるのでないかと考えました。

## 資料② 映画や絵本の感想アンケート調査 (継続中、以下 2/1 現在 回答者 31 名)

現在の年齢を教えてください。  
31 件の回答

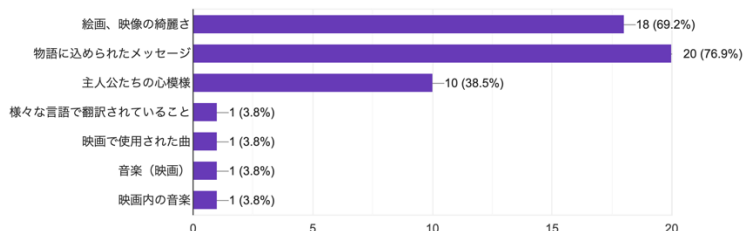


麗澤での関係部署を教えてください。  
31 件の回答



質問3 質問1または2で「はい」と答えられた方...象的に残ったものはなんですか？(複数回答可)

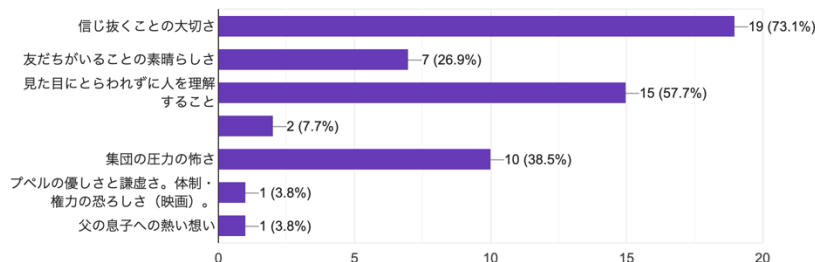
26 件の回答



質問4

質問1または2で「はい」と答えられた方にお聞き...てきたメッセージはなんですか？(複数回答可)

26 件の回答



その他、感想、質問、コメント、アイディアなど (一部抜粋)

- ・ なんでもどうせ〇〇だから・・・もう無理だとすぐに決めつけてあきらめてしまっはいけないということを感じた。どんな状況も上を向いていこう。と感じました。エンディングの曲もとてもいい曲で好きになりました。
- ・ 映画の後で小さな子どもが「ゴミ人間は友達なんだよ」という感想を言っていたのがとても印象に残りました。小さな子どもから大人までを巻き込めるストーリーだと思います。
- ・ 映画をまだ観に行けてないですが、観に行きたいなと思っています。絵本の内容、プペルとルビッチの2人ともが相手を想って、とても優しいところに心温まりました。
- ・ 幼稚園の子供たちにも、思いやりや相手の幸せを願って行動するプペルの姿はきっと伝わるかなと思います。
- ・ 一度壊れてしまった社会を再興し上手く回していくために、人々を囲い込み不都合な真実を隠すことは正しいのか正しくないのか...など色々考えさせられました。結果として、他に大切なものを見失ってしまうやり方は良くないとは思いますが、この作品に悪役はおらず社会がどうすればうまく回るのか考えた方向を少し間違ってしまったのではないかと思います。
- ・ 映画と絵本とでは内容がかなり異なっていたが、どちらも楽しめた。

## 7. 花奏～かなで～

企業名：千代田造花株式会社

経済学部 経済学科

観光地域創生専攻

赤岩 麻里

国際学部 グローバルビジネス学科

グローバルビジネス専攻

福島 五和

グローバルビジネス専攻

福原 彩那

担当教員 経済学部 吉田 健一郎

## 1. プロセス

日程	内容
10月29日	第1回ミーティング <ul style="list-style-type: none"> <li>・顔合わせ</li> <li>・自己紹介</li> <li>・企画趣旨確認</li> </ul>
11月5日	第2回ミーティング <ul style="list-style-type: none"> <li>・企業様と顔合わせ、自己紹介</li> <li>・企画内容確認</li> <li>・最終到達目標設定</li> </ul>
11月14日	1回目 サンプル作成、作成風景撮影
11月26日	第3回ミーティング <ul style="list-style-type: none"> <li>・ターゲット選定</li> <li>・デザインのアップデート案を提示</li> <li>・アンケート試作</li> </ul>
12月5日	1回目 サンプル完成
12月10日	第4回ミーティング <ul style="list-style-type: none"> <li>・サンプル講評</li> <li>・次回サンプル作成の考案</li> </ul>
12月14日	第5回ミーティング <ul style="list-style-type: none"> <li>・マーケティングについて考案</li> </ul>
12月18日	2回目 サンプル作成  第6回 ミーティング <ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケートフォームの作成</li> </ul>
12月23・24日	千代田造花様 撮影
1月16日	2回目サンプル完成
1月18日	第7回ミーティング <ul style="list-style-type: none"> <li>・最終報告会に向けて資料作り</li> <li>・サンプル好評</li> </ul>
1月25日	第8回ミーティング <ul style="list-style-type: none"> <li>・最終報告会に向けて打合せ</li> <li>・発表内容確認</li> </ul>
1月28日	千代田造花様 最終報告会
2月3日	全体報告会

## 2. テーマの概要

花奏～かなで～

「思いを形に」心の中にある沢山の思いを伝えたいけど、うまく伝えられない・・・  
そんな方をターゲットにずっと残る・ずっと心に残るものとして、皆さんの素敵な思い出を造花という形として、皆様のもとに届けるサービスです。

## 3. 千代田造花さんとのヒアリングから、打ち合わせを何度も重ねて、最終商品となるまで

心の中にある沢山の思いを大切な相手に伝えたいけどうまく伝えられない。  
そんな悩みに対し、千代田造花では思いを形にし、心にも形としても残せるサービスとしてこのプロジェクトは始まりました。

この作品の特徴として、人生の節目の日や、大切な日の思い出を世界に一つだけの思いのこもったお花にし、インテリアや髪飾りコサージュとしてずっと飾れる、使えるということです。

また、顧客 1 人に寄り添った作品作りとして、制作過程においても沢山のこだわりがあり、他には真似できない千代田造花ならではの技術を使用しています。

このようなこだわりや世界観を最大限に伝えるべく新たなマーケティングとして「D2C ブランド」を提案しました。D2C ブランドにおいて最も大切になってくるのが SNS、今回の場合なら Instagram の特徴である写真と文章をどれだけ活かせるかにあります。

作品単体を売るのではなく、思いを形にした作品とともに、千代田造花の作り出す他には真似できない暖かな世界観を一緒に売ることで、商品価値が高まり、今の時代にあったマーケティングができると考え、提案しました。

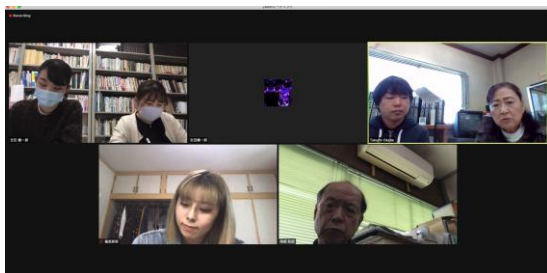


図 Zoomによるヒアリング



図 打ち合わせ風景



図 最初の試作品と最終的な商品案

#### 4. 提案内容

ヒアリングを終えて、千代田造花さんにサンプルの作成を2回に渡り依頼し、出来上がった試作品をもとにアンケート調査を行った。そして、千代田造花さんが今回のプロダクトを展開していくにあたって、D2C (Direct to Consumer) ブランドにおける知見を用いて、千代田造花さんの世界観を伝えられるプロモーションを考案した。

以下、提案内容を示したスライドである。本スライドは大きく3つに分けられ、第1部は千代田造花さんのWebページ、具体的にはLP (LandingPage)<sup>1</sup>としてそのまま使えることを想定したレベルのものを目指した。第2部は本プロダクト・サービスのニーズ調査の結果を示した。第3部は千代田造花さんの世界観(「思いを形に」や「色にこだわる」、「世界に一つだけ」など)を伝えられる画像と文章をInstagram風を示した。

<sup>1</sup> ユーザーが最初に訪問するWebページのことで、リンクがない、縦長で、縦スクロールが必要、テキストより、イメージ画像を多用する、デザインが派手、ボタンサイズが、やたら大きいなどの特徴を持ち、問合せ・資料請求・注文を得ることを目的としたWebページ。





麗澤・地域連携実習

千代田造花株式会社

作り手の「手」を背景画像としたタイトルスライド



花奏～かなで～

あなたの大切な思いを形に

作り手の「手」の上にあるプロダクトとともに、サービス名を伝える



### 思いを形に

心の中にある只山の思い  
伝えたいけどうまく伝えられない……

そんなことはありませんか？  
ずっと残る、ずっと心に残せる思い出として、  
あなたの素敵な思いを形にしませんか？

本サービスのコアコンセプト1を私たちが作成したプロトタイプの前画とともに伝える



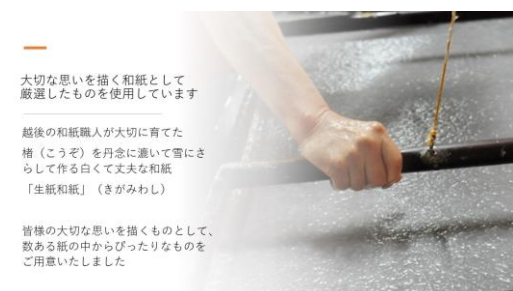
### ずっと飾れる ずっと使える

ずっと飾れるインテリアとして

大切な日に使える髪飾り  
コサージュとして

大切な思い出とともにいられる  
ずっと一緒にいられる  
そんな素晴らしい商品です

本サービスのコアコンセプト2を前のスライドで示した原画が商品となったものとともに伝える



大切な思いを描く和紙として  
厳選したものを使用しています

越後の和紙職人が大切に育てた  
楮（こうぞ）を丹念に選んで雪にさらして作る白くて丈夫な和紙  
「生紙和紙」（きがみわし）

皆様の大切な思いを描くものとして、  
数ある紙の中からぴったりのものをご用意いたしました

原料の価値を伝える



世界に一つだけの色を作り出す筆

### 色にこだわる

一番のこだわりである色  
沢山ある染料の中から色を混ぜて  
独自の色を造ります  
お客様のイメージに沿った商品を  
提供できるようにしています

他には真似できない、  
千代田造花ならではの  
こだわりです



千代田造花さんのこだわりを  
世界に一つだけを作る染料と筆の画像  
とともに伝える

### 創業50年以上の自信と実績

千代田造花株式会社は創業以来、  
造花一筋で商売をしてきたメーカーです

メイドインジャパンにこだわるからこその高品質

世界に一つしかない  
あなただけの「花」をお届けします



千代田造花さんの強みをピンセットで  
作業する作り手の「手」とともに伝える

### 特別な日の贈り物に

結婚式の記念品として、  
成人式のお祝いや、七五三の記  
念品として

ずっと形に残り  
ずっと寄り添ってくれる  
特別な日の贈り物として  
最高のものをお届けいたします



コアとなる用途を完成品の画像ととも  
に伝える

### 製品について

和紙の大きさ：A4サイズ

販売予定価格：8,000~10,000円

販売方法：インターネットによる販売

PR方法：SNSを活用したPR  
(Instagram,HPなど)



製品概要を私たちが試作した原画を描  
く道具とともに伝える

## 作品が完成するまで



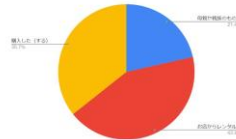
## プロダクトを発注してから、手元に届くまでの流れ

## アンケートによるニーズ調査の結果

### アンケート調査について

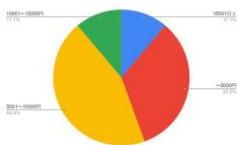
- ・実施期間：2020/12/18~2021/1/25
- ・対象者：成人式を迎える前女子学生
- ・アンケート方法：Googleフォームによるアンケート
- ・総件数：28人
- ・目的：成人式で使う髪飾りの相場を把握する  
成人式を迎える前の方たちにとって、この商品はどのようなイメージを与えるのかを把握し、ニーズを確認する

### 成人式に使う髪飾りはどのように調達しましたか？



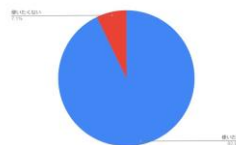
- ・振袖とともにお店からレンタルする方が多い
- ・購入する方に届くメッセージを纏っていかねばならない

### 購入・レンタル・自分で制作した場合、値段はいくらかかりましたか？



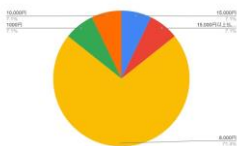
- ・成人式の場合、5000円~10000円で髪飾りを用意する人が多いことがわかった
- ・どのようにして商品価値を生み出していくかが重要となる

### 成人式に和紙に絵や文字を描いて作った髪飾りを使用してみたいと思われますか？



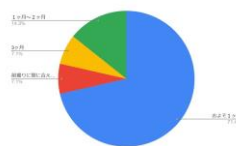
- ・使いたいと答えてくれた方が92.9%ととても多かった
- ・人生の大切な節目に身につけるものとして、需要はあると分かった

### 上記の髪飾りの価格について、購入しても良いと思う金額はいくらですか



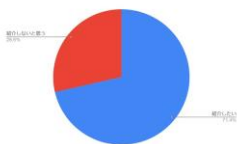
- ・販売予定価格よりも安価で提供してほしいという声が多かった。やはり、しっかりと工程を見せて、なぜこの金額になるのかを説明する必要があると感じた。

### 和紙に絵や文字を描いた後、完成して届くまでの期間について、どの程度待てますか



- ・他の仕事と両立しながら1ヶ月くらいでの納品は可能か？

### 価格や届くまでの期間が希望通りだったとして、このサービスを母親やおばあちゃんに紹介して、プレゼントしてもらいたいですか？



- ・本人に対するプロモーションは有効であることが分かった

このサービスを使って、描いた和紙でどんなお花を作って欲しいですか。またはどんなものを作ってほしいですか。

- ・カーネーションやネモフィラ、牡丹の花
- ・梅や藤、桜などの和花だと、より和の感じが出ていいと思う
- ・バラなどの洋花
- ・紫陽花
- ・日用品として使えるアクセサリ



## D2C ブランドの説明と、D2C ブランドを確立するための提案

### マーケティング提案

たくさんの可能性を秘めた商品を  
どのように世に送り出していくか

商品価値や世界観をどのように理  
解してもらうか

ターゲットにどのように届けるか



### D2Cブランドとは

新しい消費の価値観を持つミレニアル世代以下  
のターゲットに対し、ユニークな世界観を  
下敷きにしたプロダクトとカスタマーエクス  
ペリエンス、SNSや店舗を通じた顧客とのダイ  
レクトな対話、垂直統合したサプライ  
チェーンを武器に、VCから資金調達を行い、  
短期間に成長を目指す、デジタルをアーダト  
リブなライフスタイルブランド

(出典) 株式会社D2C「D2Cブランド」と「デジタル」を軸とした戦略

「モノ」や「コト」を売るのではなく、「コト  
付きのモノ」を売る  
世界観を大切に、時代に合った自社ブラン  
ドを作っていく

### D2Cブランドと伝統的なブランドの違い

D2Cブランド		伝統的なブランド
デジタルネイティブ	出发点	メーカーとして誕生
直接販売 連絡のコミュニケーション	チャネル (販売方法・販売経路)	小売店経由で間接販売、広告代理店経由 の間接コミュニケーション
比較的安価	価格帯	中間コスト込みのため高価
指数関数的成長	成長速度	線形な成長
ライフスタイル、世界観	提供価値	プロダクト（機能性）
ミレニアル世代以下	ターゲット	X世代以上
コミュニティであり仲間	顧客の位置づけ	お客様

D2Cブランドとして  
多くの人に「千代田造花」を知らせたい！

作り手の世界観が  
ターゲットとなるユーザーに  
直接伝わるような画像とメッ  
セージ添えて発信する



## 5. フィードバック

### 【千代田造花様から頂いたフィードバック】

- ・ 私たちの狙いである思いを形にする仕事＝夢を売る仕事として最高の夢を作り出す仕事であると再確認できた。
- ・ 商品として売り出せる自信に繋がった。
- ・ 普段は気づかない作業の中に、自社のこだわりや世界観を表せるような風景があることを気づかせてもらった。
- ・ 試作過程において作品に対する思いの重さや大切さ、様々な思いがあることを知った。
- ・ 納得のいく心のこもった作品づくりに繋がった。
- ・ 作品が完成し、届いた後、お客様が実際に笑顔になる様子を知りたい、受け取った後の出来事や感想が知りたい。→ハッシュタグの活用により、完成して手元に届いたものがどのようにお客様に響いたかを確認できるのではないかと提案。
- ・ 若い世代の需要に応じた SNS の活用、発信の仕方に納得。

### 【先生から頂いたコメント】

- ・ 写真の撮り方や見せ方が重要である。(D2C ブランドにおいては大きなカギとなる)
- ・ Instagram 内で千代田造花から購入者へいいねやコメントなどを返すことで喜びやリピーター、紹介につながる。
- ・ SNS を使った地道なプロモーションが今後の武器になる。

## 6. 感想・まとめ

この企画に参加する前までは、「造花」に対し親やお婆ちゃん世代がコサージュとしてつけているイメージで、私たちの世代には手に取りにくい商品だと思っていました。しかし、この企画を通して、造花でもデザインや色使いなどの工夫や、自分の大切な思いを形にできる製品もあるということを知り、私たちの世代にも手に取りやすい商品になったと思います。

また、製品のサンプルを作る過程で、自分の思いを込めたものが形になることの素晴らしさを学びました。それに加え、私たちの世代にしか出せないような発想や、マーケティングの方法、企業が大切にしたい商品ブランドや世界観も大切に売り出し方も提案できたと思います。

このサービスによって、沢山の方が笑顔になってくれることを願っています。

## 8. 新メニュー開発と SNS を活用したマーケティング

企業名 : Café Path Travel & Eats

- A 岡野 莉里 外国語学部外国語学科英語コミュニケーション専攻
  - A 向後 美乃里 外国語学部外国語学科中国語・グローバルコミュニケーション専攻
  - A 小松 みのり 経済学部経済学科経済専攻
  - A 加藤 日和 経済学部経済学科観光・地域創生専攻
  - A 町田 稜太 経済学部経営学科 AI・ビジネス専攻
  - B 廣瀬 友梨 外国語学部外国語学科英語コミュニケーション専攻
  - B 鈴木 陽之助 外国語学部外国語学科中国語・グローバルコミュニケーション専攻
  - B 岩崎 友泰 経済学部経営学科経営専攻
  - B 中村 陸斗 経済学部経済学科観光・地域創生専攻
  - B 柳下 七海 経済学部経営学科 AI・ビジネス専攻
  - C 渡邊 沙也 外国語学部外国語学科英語コミュニケーション専攻
  - C 粟村 康亮 経済学部経済学科経済専攻
  - C 鈴木 美優 経済学部経営学科経営専攻
  - C 元井 陽登 経済学部経済学科観光・地域創生専攻
  - C 野中 薫湖 国際学部国際学科国際交流・国際協力専攻
  - D 櫻井 くるみ 外国語学部外国語学科英語・リベラルアーツ専攻
  - D 大久保 龍我 経済学部経済学科経済専攻
  - D 小山 陽生 経済学部経営学科スポーツビジネス専攻
  - D 柴崎 隼斗 経済学部経営学科 AI・ビジネス専攻
  - D 青木 飛香里 国際学部グローバルビジネス学科グローバルビジネス専攻
  - E 金子 明莉 外国語学部外国語学科中国語・グローバルコミュニケーション専攻
  - E 蟹沢 玲伊 経済学部経済学科経済専攻
  - E 池田 梨緒 経済学部経済学科観光・地域創生専攻
  - E 永田 健斗 経済学部経営学科 AI・ビジネス専攻
  - E 小野 瑠々華 国際学部グローバルビジネス学科グローバルビジネス専攻
- (下線はグループリーダー)

担当教員 経済学部 下田 健人

## 1. プロセス

日程	内容
10月28日	キックオフミーティング（オンライン） 自己紹介など
11月初旬から	グループごとに作業開始、カフェで試食、アイデア出し、成果
11月上旬	全体講義
1月9日	発表会
2月3日	全体報告会

## 2. テーマの概要

カフェにおける2つのミッション

- (1) カフェでの新メニューを作成する。
- (2) SNSで新メニューを拡散する。

各グループ毎に上記の2つのミッションについて調査、検討し、アイデアを提案する。

## 3. ヒアリング調査

グループ毎に、適宜飯島社長、竹原店長にヒアリング調査を実施する。

## 4. 提案内容

グループA：お好み焼き風ワッフル（柏市特産のニラを活用）

グループB：ロイヤルミルクティー風ワッフル

グループC：千葉特産品ピーナッツを取り入れたピーナッツ・ワッフル  
アーモンドミルクとバナナのスムージー

グループD：幻想ポークのベーコンエッグサンド

カスタムバブルワッフル

イエロースムージー（ビワはちみつ）

SNSの活性化、投稿、ストーリーにアップ

グループE：千葉名産のさつまいもペーストを生地塗りに塗り込むワッフル。  
調理中の動画をSNSで拡散。

## 5. 連携先からのフィードバック

発表会では、飯島社長、竹原店長に参加いただき、講評いただいた。概ね好意的な発言だった。

## 6. 感想・まとめ

専攻横断的、オンラインといった状況から、どのグループもコミュニケーションやプロジェクトの進行に苦労したようだ。担当教員である下田に対する報連相も必ずしも十分に行き来できず、コロナ禍における本授業の進め方でハードルが高かった。

## 9. イオンモール柏の地域に根ざした魅力づくり

企業名：イオンモール柏

### 経済学部経済学科

経済専攻	小原 完太
経済専攻	西山 貴博
経済専攻	根本 祥多
経済専攻	藤崎 康太
観光・地域創生専攻	高野 達也

### 国際学部国際学科

国際交流・国際協力専攻	村田 颯馬 ※ グループリーダー
グローバルビジネス専攻	比嘉 彩夏

担当教員 経済学部 大越 利之



## 1. プロセス

日程	内容
11月6日	第1回グループワーク ・顔合わせ ・自己紹介
11月13日	第2回ミーティング ・ブレインストーミング
11月20日～12月4日 毎週金曜日（昼休み）	定期ミーティング イオンモール柏さんへの取材項目、スライドの作成 イオンモール柏さんへのアポイントメント
12月4日	イオンモール柏さんへのヒアリング調査
12月11日～1月22日	取材メモの作成 提案内容の方向性の決定 プレゼンのスライドの作成
1月27日	先生へプレゼンの練習
1月29日	プレゼンのスライドの最終調整 イオンモール柏さんへプレゼン
2月3日	全体報告会

## 2. テーマの概要

このグループは、イオンモール柏さんから事前に「イオンモール柏の地域に根ざした魅力づくり」という課題テーマをいただいた。このテーマに沿うように、まず2つのグループに分かれてKJ法とブレインストーミングにより、取材時の質問項目について議論した(図1)。その後、取材のアポイントメント係を決めて取材のアポイントメントを取って取材に臨んだ。

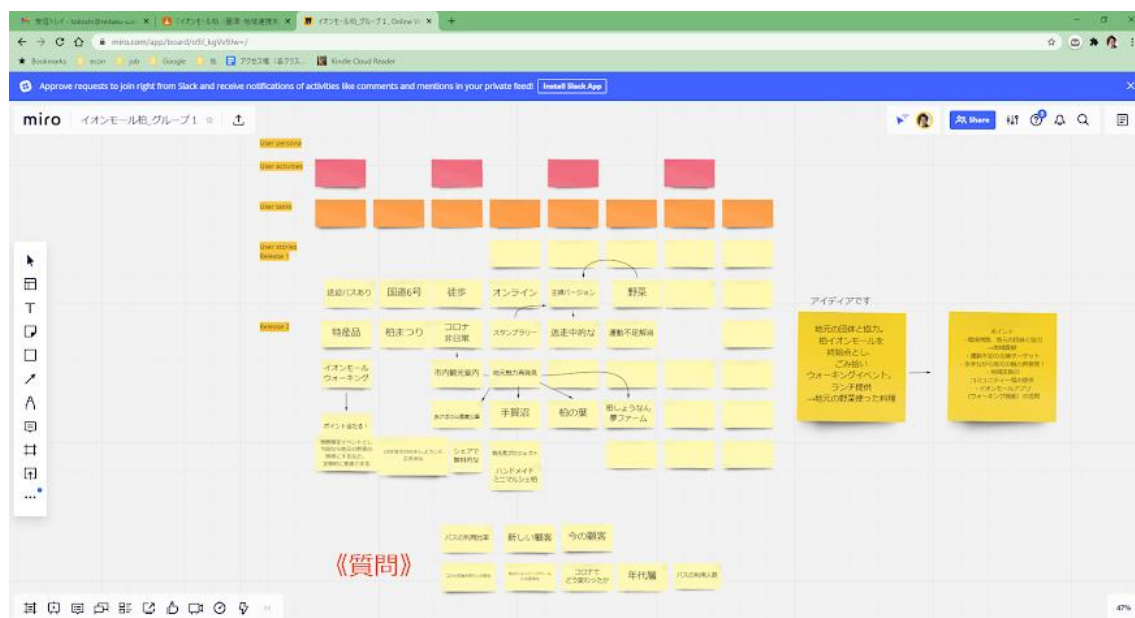
取材では、以下の7の大項目について質問した。

- ① 顧客の交通手段利用比率
- ② 顧客層について
- ③ コロナ前後の変化
- ④ 地元農家や商店街との連携・協力について
- ⑤ イオンモール柏さんの特徴
- ⑥ 他団体とのコラボレーションについて
- ⑦ イベント実施に関する留意点について

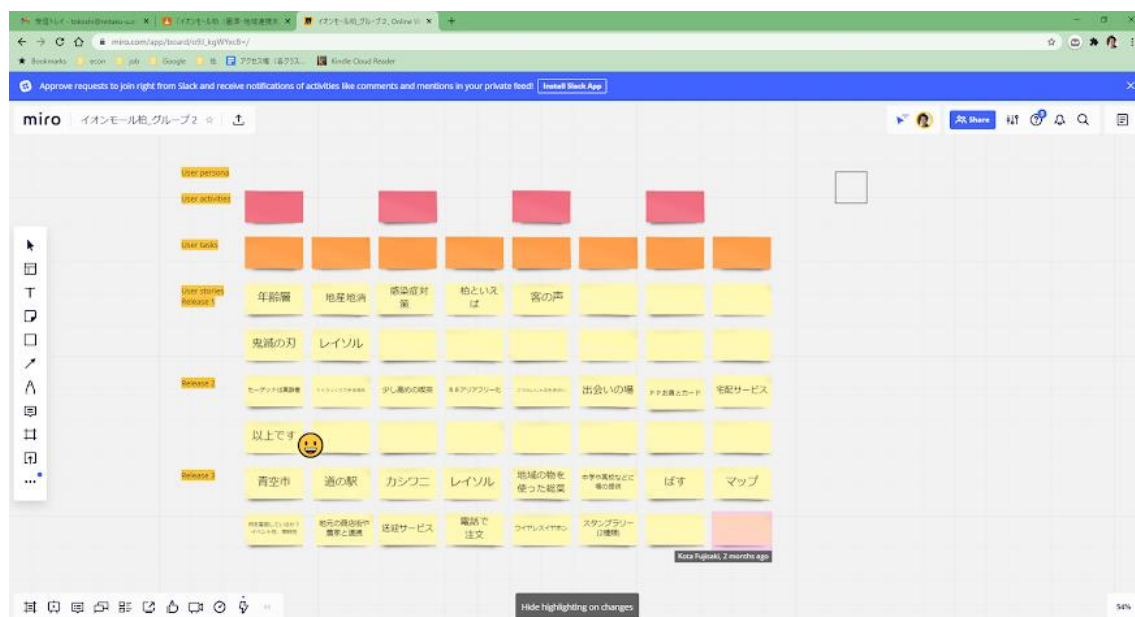
取材によって、地域貢献以外の重要なテーマがみえてきた。顧客年齢層については、現状では40代、50代のお客が多く、「30代のファミリー層」の来客を増やしたいこと、企画を

考えるうえで、単発のイベントで終わるのではなく「入居するテナントの売り上げへの波及効果」も考えることが今回の研究テーマに加えられた。

図 1. オンラインホワイトボード「MIRO」を用いたブレインストーミングおよび KJ 法 (グループ 1)



(グループ 2)



そこで取材後には「地域の魅力発信」「30 代ファミリー層の来客増」「テナントの売り上げアップ」をキーワードに、各自でそれぞれどのようなものがあるかを考え、定期ミーティングで話し合って提案の方向性を決めた。イオンモール柏さんから「イベントを開催するとしたら物販よりもワークショップなどにとどめてほしい」というリクエストなども加味して、「イオンモールウォーキングアプリの活用」、「全員参加型でオブジェを完成させていく

謎解きイベント」、「スタンプラリー」などの案をもとに考えていくことにした。最終的に地域貢献と30代・ファミリー層の新規顧客層獲得に焦点を当て、小さな子どもや家族で楽しめるように「謎解きARラリー」を提案した。

### 3. ヒアリング調査

取材は2020年12月14日にZOOMを利用し行った。前述の7つ質問により以下のことが分かった（図2）。

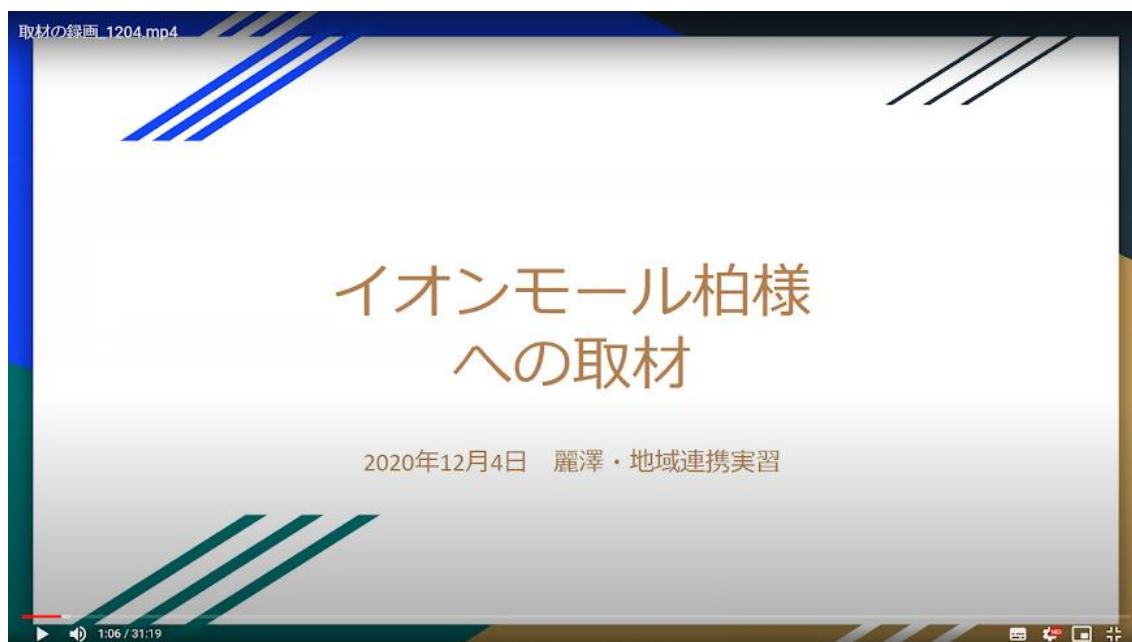
- ① お客様の交通手段の利用比率は、自家用車が5割、自転車・徒歩が4割、無料送迎バスが1割である。
- ② 現在の主な顧客層は、平日は60-70代、休日は40-50代が多く、男女の割合は6:4である。また、今後のターゲットとする顧客の年齢層は30代のファミリー層である。
- ③ コロナ前後の変化については、1度目の緊急事態宣言直後は来客数が2~3割減り、それに比例して売り上げも2~3割減った。取材時点ではコロナ前の8~9割まで戻っている。なお、顧客層に変化はない。
- ④ 地元農家や商店街との連携・協力についての可能性を質問したところ、注意点として、地元の農産物を扱うモール内のテナントの「わくわく広場」やイオンの野菜売り場の売りに上げに影響を与えないような企画が重要であることがわかった。
- ⑤ 他のショッピングモールと比較した場合のイオンモール柏さんの特徴について質問したところ、以下のことが分かった。
  - ・ イオンモール柏さんを利用している人の中でイオンモールアプリを利用している人を正確には把握できないが、イオンモールアプリでイオンモール柏をお気に入り登録している人が1万1千人、来客者は1万5千人であることから、おそらくほとんどの客が利用している。
  - ・ イオンモールウォーキングの実施で柏市の地域包括支援課と連携することになり立地上地域からの固定客を獲得し歩くついでに買い物してくれるようになった。
  - ・ 新しくできるスポーツジム関係の商品を取り扱うテナントとのマッチも予定している。
  - ・ イオンモール柏さんの特徴的な点として比較的小規模で住宅地の中に建てられているため周辺地域から週に2,3回来るような常連客が多い。そのような面ではイオンモールウォーキングでうまく活かしている。
- ⑥ 他団体とのコラボレーションについて、例として柏レイソルとのコラボ企画の可能性について質問したところ、ただのイベントとして終わるのではなくイオンモール柏さんの売り上げ増や、来客促進につながるようにしてほしいこと、他の例として鬼滅の刃とのコラボについてはイオンモール株式会社と鬼滅の刃の著作権を持っているところがうまく調整が取れば可能だということがわかった。
- ⑦ イベント実施に関する留意点については以下が挙げられた。
  - ・ モール内でイベントの集客が最も期待できるエリアはセンターコート。ただし、近隣

のテナントへの迷惑、並んでいる人とのバッティング、コロナ対応としての 1m 以上の間隔を取ること。

- ・ イベントの目標として、お客様に来ていただいて商品を買っていただき、売り上げにつなげることを念頭に置くこと。
- ・ 実施頻度として、常設だとテナントになってしまい家賃が発生してしまうので、期間限定のイベントが望ましいこと。
- ・ 現在のイオンモール柏さんの大きな課題である 30 代ファミリー層の来客につなげること。

もともと宿題としていただいていたローカライズ、地元の資源・財産を活用し、その魅力を伝えることだけでなく、このヒアリング調査を通して現在は 50 代のお客様が多く、30 代・ファミリー層の方に来ていただけていないことを課題と感じていること、イベント目標は来ていただいて商品を買っていただき売上を上げることに繋げることの 2 点を特に重要だと感じ、提案する内容に生かしていかれたらいいと思った。またイベントを実施するうえで近隣への迷惑にならないようにすることやコロナ禍による対応するスタッフの接触対策などに気を付けてほしいことも重要だと感じた。

図 2. Zoom によるオンラインでの取材の様子





12月25日（金）に実際にイオンモール柏へ行き、「ペル」とのコラボ企画に参加して自分たちのイベント企画案の参考にした（図4）。

図4. イベント参加の様子：全体ミーティング用資料から抜粋

映画「えんとつ町のペル」

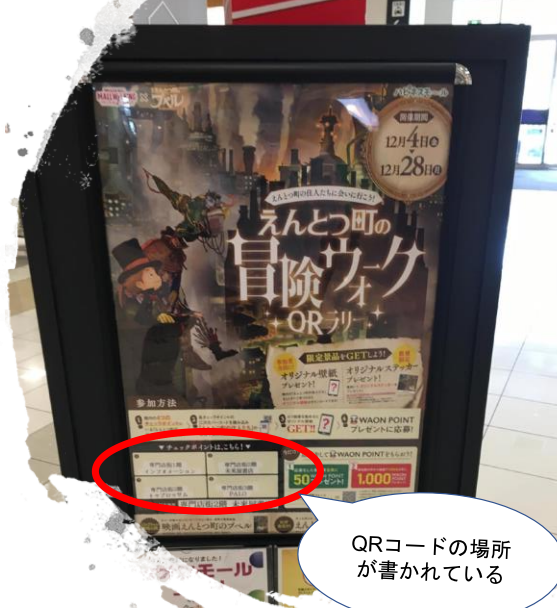
×

イオンモールウォーキング

- 内容
- スマホのカメラを使って
- 館内の4か所に設置してある
- QRコードを読み取りスタンプを集める。


すべてのスタンプを集めると...

- 壁紙がもらえる(ステッカーも)
- WAONポイント獲得のチャンス!




やってみて感じたこと


1. 一階から三階への縦の移動と店舗間の横の移動を適度に使っている。
2. 正午から午後1時の間だったからか期間のほうだからかQRコード読み取り地点で人と会うことはなかった。



QRコードを読み取ると




←始める前に三つの質問に答える。



←全クリすると...

再び図書館へ戻り壁紙を見せると...→



## 5. 提案内容：ARを用いた謎解きラリー

取材内容をもとに、30代・ファミリー層をターゲットとしたイベントを提案した。提案した内容は「ARを用いた謎解きラリー」である。2021年1月29日（金）にZOOMを用いてプレゼンテーションを行った（図5）。提案の主な内容は以下のとおりである。

(1) 企画の狙い

謎解きラリーによりイオンモール柏さんへの滞在時間の延長、イオンモール柏さんを利用するきっかけにする、イオンモールウォーキングを始めるきっかけにするこの3点である。

(2) 30代・ファミリー層の新規顧客層を獲得するためのポイント

謎解きのレベルを子ども用と大人用の2つを用意することにより家族で楽しめるようにした。また、ARで立体的な映像を見て楽しんでもらうところ、景品でカシワニシールをもらえるところがある。景品のカシワニシールは公式ホームページで見たところ安価でコストを削減できて参加者の購入単価が少しでも低いところで利益を生み出せる点や担当の先生の実体験の話から良いのではと考えた。このARを用いた企画は、他の集客イベントとの差別化を図ることができるのではないかと考えた。

(3) 地域の魅力発信

イオンモール柏さんからの宿題であった地域貢献の点は、謎解きストーリーの中に柏市の公式キャラクターであるカシワニやかしわもっちい、手賀沼や道の駅しょうなんといった地元の観光スポット、特産品を登場させるところがある。なお、カシワニやかしわもっちいは著作権フリーで利用することができる。

ARの依頼先として地元の専門学校や企業を提案した。

(4) テナントの集客と売り上げ

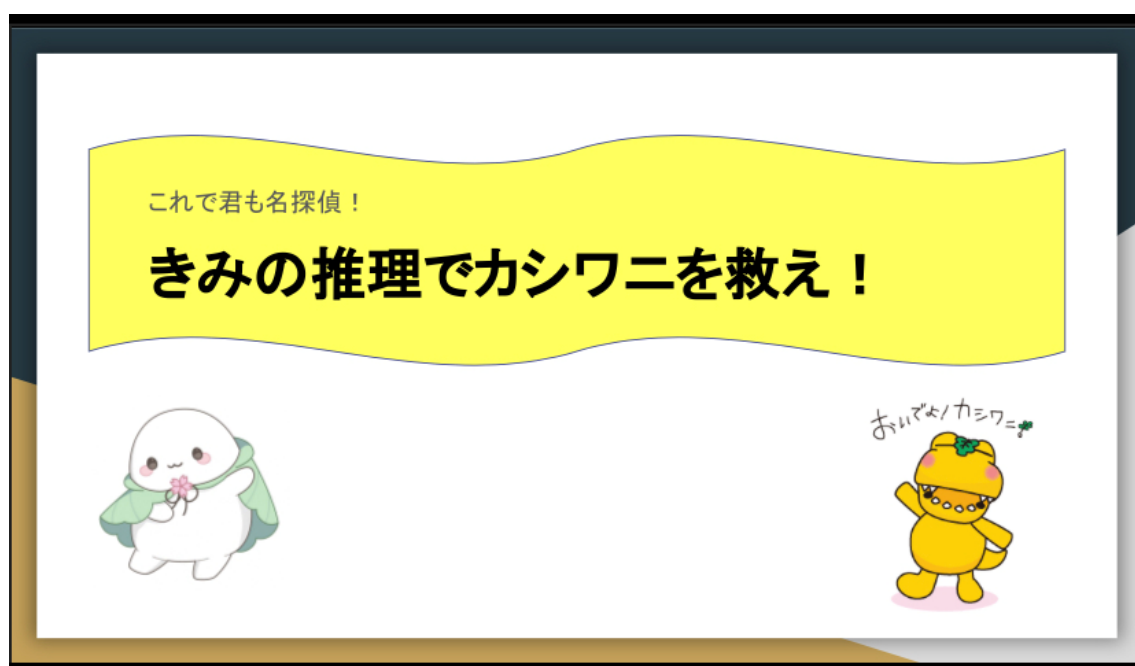
テナントへの集客と売り上げ増に繋げることを考え、レシートの提示をイベントへの参加条件にすることを提案した。レシートの活用例として、レシートの提示により「謎解きのヒント」をもらえるようにするという案もある。

(5) 滞在時間の延長と新規顧客の獲得

コロナ対策として、お客様が分散するようにARのパネルの設置場所を「ペルのイベント」の2倍の8カ所すること、密を防ぐためにパネルに書かれている文字を大きくすること、大声での発声や会話を控えてもらうことを書いた注意書きを貼ること、従業員・お客様のマスクの着用の徹底、パネル設置場所の消毒液の確保を提案した。

また広告の活用としてイオンモール柏さんの公式LINEなどのSNSやチラシを活用することやイベントの準備費用についてもプレゼンした。

図 5. Zoom によるオンラインでのプレゼンの様子







## 6. 連携先からのフィードバック

プレゼン終了後、イオンモール柏さんから以下のコメントをいただいた。

### (1) よかった点

- ・ イオンモール柏まで足を運んで、実際にペルのスタンプラリーに参加して提案の参考にしていただけたところ。
- ・ コロナ禍で大型のイベントは難しい中、モールの回遊型イベントを提案したこと（コロナ禍でのイオンモールイベントに対する考えと、私たちの企画案がマッチした）。
- ・ レシートをイベントの参加条件に入れるなど、テナントの収益を考えていること。
- ・ AR 依頼先として地元の学校や地元企業を考えていたこと。

### (2) 改善点

- ・ レシート 2000 円以上がクリアできるかどうかは業態による。衣料品店などなら簡単かもしれないが、イオンモール柏に多い飲食だとハードルが高い。

### (3) 総評

- ・ この企画が成功したとしたら、イオンモール柏内の企画だけで終わらせるのはもったいない。他の柏市内の観光スポットでも活用できるのではないかな。

## 7. 感想・まとめ

参加メンバーから、今回の実習に関して以下の感想が寄せられた。

- ・ 今回の麗澤・地域連携実習を通して外部の方に向けて提案するという今まで経験したことのない貴重な経験をすることができたのがよかった。
- ・ また地元に関連し利益を生み出すためのイベントを考え実現するために考えプレゼンできて貴重な体験でもっと頑張って次に生かしたい。

- ・今年度はコロナ禍で Zoom によるオンライン授業の中でメンバーとコミュニケーションをとることは難しいと感じたが、最終的には案をまとめ、無事プレゼンをすることができたのでよかった。
- ・またコロナ禍の中で学校に行けず学生同士で触れ合う機会もなかなかない中、こういう経験をできたことはこれからの生活に必ず生きてくると思った。
- ・複数人で1つのことを考えるのはなかなか難しかったがとても楽しかった。この経験を活かしていきたい。
- ・メンバーの皆が様々な意見を出す中、自分の考えに自信が持てず意見を出す際に遠慮してしまっていたのでまたこのようなプレゼンを作る機会があれば今回の経験を活かしたい。
- ・地域の魅力を伝えるという点では色々考えることができたが、取材で売り上げのことも考えてほしいと聞いて売り上げのことも加味して考えるのが難しかった。ただ皆で協力して作っていったプレゼンではよかったと喜んでいただけてよかった。
- ・まとめとして今年度はコロナ禍のなかオンライン授業となってなかなか学生同士で触れ合う機会がなく、コミュニケーションをとるのが難しかったり複数人で1つのことを考えたりと難しいところがあったり自分の意見に自信が持てず遠慮してしまうところもあったが、楽しいところもあり、最終的に無事にプレゼンをすることができ喜んでいただけてよかった。
- ・外部の方に向けて提案する、地元に関連し利益を生み出すイベントを考えプレゼンするという貴重な経験ができてよかった。このような経験をできたことはこれからの生活に必ず生きてくると思うし活かしていきたい。

## 8. 成果物：謎解きのストーリー

### ストーリー

1、ある日、カシワニ君がいつものように手賀沼まわりをのんびりしていると、困っているかしわもっちを見つけました。どうやら、沼にボールを落としてしまったそうです。かしわもっちもカシワニ君も泳ぐのが苦手でした。なので、沼の近くにあるボートを使おう！と思いました。しかし、そのボートのなかには穴が開いているものがあります。穴が開いていないボートはどれか教えてあげましょう

2、無事、ボールを拾うことができたふたりは、一緒にキャッチボールをして仲良くなりました。しばらく遊んでいると、カメ君がたくさんの手紙を持って困っていました。どうしたの？と尋ねるとカメ君は「はやくウサギさんに手紙を届けなければいけないから近道を探しているんだ」と言いました。カシワニとかしわもっちいとのみちが一番近道なのか一緒に考えてみよう

3、カメ君は近道を教えてくれた3人に「ありがとう。お礼と言っはなんだけど君たちに今日の晩御飯をごちそうさせてくれないか」と招待してくれました。そして、その夜ごはんの材料をみんなで買うことになかしわもっちが道の駅しようなんへ案内しました。そこには柏で採れた野菜がたくさんあって、夜ごはんに使いたいぶが見つめることが出来ません。どのコーナーにかぶはあるでしょうか？

4、道の駅しようなんで買った野菜を使ってみんなで夕ご飯を作りましたがもちろんそこにはカシワニの大好きなやきとりも！実はボールを拾ってくれたお礼がしたかったシャイなかしわもっちいが、内緒で買ってきてくれたのです。カシワニはみんなのことがもっと大好きになりました。カシワニは今日沢山手伝ってもらったお礼に、カシワニシールをくれました！そしてみんなで仲良くご飯を食べて、また遊ぶ約束をしました。なにをして遊ぶでしょうか？

## 10. 加飾紙を若者へ知ってもらうには

企業名：有限会社 湯島アート

### 国際学部グローバルビジネス学科

グローバルビジネス専攻	関根 綾佳
グローバルビジネス専攻	出頭 日菜
グローバルビジネス専攻	南雲 佑希
グローバルビジネス専攻	関根 大輝

### 国際学部国際学科

日本学・国際コミュニケーション専攻	芳賀 夏海
国際交流・国際協力専攻	山里 哲平
国際交流・国際協力専攻	鶴澤 凜 ※グループリーダー

担当教員 経済学部 籠 義樹

## 1. プロセス

日程	内容
2020年 11月6日(金)	第1回グループワーク ・顔合わせ ・自己紹介
11月16日(月)	第2回ミーティング ・アイディア交換会
11月23日(月)	第3回ミーティング ・ヒアリング調査で聞きたいことを考える
11月30日(月)	第4回ミーティング ・ヒアリング調査で聞きたいことをまとめる
12月15日(火)	第5回ミーティング ・湯島アート様へのヒアリング調査実施日
12月16日(水)	第6回ミーティング ・湯島アート様へのヒアリング調査の結果の確認と今後の進め方を考える
12月22日(火)	第7回ミーティング ・ヒアリング調査から湯島アート様への提案を考える
1月13日(水)	第8回ミーティング ・提案することをまとめる
1月18日(月)	第9回ミーティング ・プレゼンの仕上げ
1月21日(木)	第10回ミーティング ・湯島アート様へのプレゼンテーションの練習会
1月22日(金)	第11回ミーティング ・湯島アート様へのプレゼンテーション
1月29日(金)	第13回ミーティング ・全体報告会と報告書の準備
2月3日(水)	全体報告会

## 2. テーマの概要

ワークショップや展示会といった販路開拓のためのアクションとして SNS を活用して発信する方法を提案する。

最初のテーマ（授業開始時）

「SNSを活用した湯島アートさんのアクション発信」～WEB ショップとの連携～

### 3. ヒアリング調査

#### (1) ヒアリング調査で分かったこと

- ・加飾紙について・現在の顧客の年齢層・ターゲットの理想は若い人・ワークショップについて・人気の商品・通販サイトについて・現在運用している SNS について・海外への販売について

#### (2) 一色さんが不安に思っていること

- ・加飾紙が広く知られていない・若い人の好み分からない（好きな色やどんなものが欲しいのか）・値段が高い  
→若い人がターゲットだが、若い人が好むものがわからない、
- ・規模の小さな会社なので諸々の費用の問題

### 4. アンケート

#### (1) アンケートの実施概要

実施期間：冬休み期間中の12月28日から～1月6日

取材対象：10代～20代の若者

取材方法：Google フォームを使用したアンケートフォームを作成。

その後、グループメンバーが知り合いに拡散し、アンケートに答えてもらう。

取材内容：加飾紙の認知、年代別の好きな色、ほしいと思うような美術作品の形式について

#### (2) アンケート分析

- ・加飾紙を聞いたことない、知らない人は82.4%
- ・10・20代の方の好きな色は、1位青、2位ピンク黒、3位赤
- ・ほしいと思うような美術作品の形式 実用的な小物72.5%  
→青やピンク、黒などのカラー展開の豊富な、加飾紙を使ったアクセサリーや実用的な小物が良いのではないか。

### 5. 提案内容

情報発信する時におすすめのSNS『Instagram』

- ・若者が多く使っていて、写真を主な発信内容とする商品を提案
  - (1) インスタグラムの使い方→分かりやすく説明されているサイト
    - ・動画を用いてスライドにまとめて湯島アート様にお渡しした。
  - (2) 実際にInstagramに投稿する時の投稿内容の工夫
    - (#ハッシュタグをつけることなど)
    - ・参考にするというアカウントの紹介
  - (3) アンケートから得られた結果から若者向けの新しい作品を提案

## 6. 連携先からのフィードバック

「はじめに、SNS 発信について不慣れなことが多い中、誠実で丁寧な接し方が嬉しかった。次に、今回のプレゼンテーションを通して、若者へ向けた情報発信の重要性を理解し、現在再生した Twitter「一吉」で練習したのち Instagram での活動も前向きに検討している。アンケート結果では多くの方々に知られていないという厳しい現実を知ることが出来た。また、WEB/EC サイトへの取り組みもスタートし挙げられた課題に挑戦していこうと考える。一方で未だに SNS での情報発信をハードル高く感じている。具体的には、時間を費やす知識や体力、日々変化する環境に慣れること、自己表現力が必要となるため、長続きするためには自分流を見つけなくてはと考えている。他にも今回の麗澤地域連携実習をきっかけに、大量生産消費社会からの変化、SDGs の倫理的な社会への方針を軸に商品開発を進め、自身の商品を見直すこととした。伝統工芸品、手作り、必要な分だけの長く使える大切さなどは、これから、より評価されていくのだと思う。最後に、今回のプロジェクトで刺激を与えてもらったことで多くのことを決断し、皆さんの姿勢から先送りにしていたことが、今やるべきことだと気が付くことが出来た。背中を押された思いだ。」とお言葉を頂いた。

## 7. 感想・まとめ

まず、先生の指示したことをするのではなく、本当に学生が主体となり、物事を進めていくというやり方がとても難しく感じた。ミーティングの日程、ミーティング自体の進め方、自分以外の誰かを慮り成功へと軌道を描いていくことが本当に簡単ではなかった。

次に、年代の違う人へ、若い自分たちの世代のものを説明するというのが大変だった。何十歳も年上の方に、SNS というものを説明するにあたり、自分たちでは当たり前なのが全く伝わらないということを前提に、どうにか自分たちのお勧めを、言いたいことを、伝えていくにはどうしたら良いかととても考えさせられた。

そしてプレゼンでは、相手に伝える情報を完璧な状態にしてプレゼンを展開するより、わざと疑問点を残し、相手に聞いてもらいたいことを質問してもらうほうが良いプレゼンになることを知り学べた。

今回の実習は大学生としての学習をとってもいい形で経験できた。そのため多くの学びがありこの経験をさせてもらえたことに、感謝したい。湯島アートさんと、籠先生、この授業の主催、地域連携センターに感謝したい。

## 8. プレゼンテーション資料

